

古今祿鰐考

二

冊一 數部	門	身體	第八
	三	之部	六十七號



古事記傳

人

原高麗傳

人

上傳題記のある行性は十日而後  
えりて序く實物水引も織成の正直行  
者小軌を足れて定題の天子の御事也

此傳の行數が高めに定められ

九萬六千字前後の大字書用

る。是思はる如きの事は

古今妖魅考二之卷

平篤胤輯考

門人常陸國竹來道彥

山城國

江戸爲生

武藏國

森田昌成

同校

上件記

されある外。又數の僧名を舉られ。其は姑

く置て。早く寶物集。慈惠僧正。行業の高う。延暦寺小執を止。金色の天狗成。見也。

此僧の行業。高う。事ども。諸書小見え。中。今鏡九。卷。多く十訓抄。大内。五壇。御修法勤。られける。小慈惠は不動尊と。寛朝を降三世と現じて。少も本

尊小替カハらひてたり。圓融院正しく此事を御覽せられたり。  
と見え。ふと著聞集。十訓抄あどふ。雅縁阿闍梨といふ人。慈  
惠僧正。濫行肉食の人ある由云。りるよ。慈惠深く憤りて。  
三寶を祈シテし。雅縁阿闍梨三塔を走り回シテて。淨行持  
律の人々。空言を申。と詮報ハナシノウとて。狂ひ歩行アレハシり。ほとも有り。  
下シモ小舉シムる雲景クモノシキが未來記アマガタシキ。愛宕山アダガニを集シムひて。世を亂さむと計  
きる釋魔シロモの中よ。此僧も交シテて在り。其は我慢勝他アマガタヒの宿執スツシキ  
引シテて成れるあと。祇園を天台テンテイに末寺と成シムる一事コト成シム以て  
も辨シキふほし。

山海經

祇園を天台テンテイに末寺とせ成事也。今昔物語集アラタシモノゴトシ。祇園クシマともぞ

山階寺サンケイジは末寺シメジにて有リ。亦シテ比叡山ヒイケサンの末寺と成れど。其故  
も。比叡山の末寺シメジ。蓮花寺レンガサといふ寺あり。然る小祇園クシマの別  
當シテ。良筈シテといふ僧有リ。勢德セド仰ギリて世間叶シタマツル。僧あり。  
彼、蓮花寺レンガサの堂の前モミジ。紅葉モミジの有リ。流リ。十月の比色ヒカラ。微妙  
かれど。良筈シテを折取ハサフ。不遣シテ。蓮花寺レンガサ住僧制シテて云。  
く。祇園の別當シテ。德人カハは坐シテせども。何タメて天台テンテイ末寺の内ア  
係木シテをば。心シテ任シテ。按内アシナもあく折ハサフらる。極シテ。非  
常シテめ事アリ。良筈シテが使ハサフかく制シテせらきて。折ハサフ文ハシメ返シりて。此  
れむ云ヘ。良筈シテ大き小嗔ハサフて。此云アリ。あらは。其木シテ皆伐シテ  
て來キタれと云ヒ。從者共ハサドを出シ立シテ遣シり。然る小蓮花寺クシマ

住僧を定めて良筭が從者を遣せて。此木をば伐せむべら  
むと悟て。良筭の從者共の來ざる前ふ。住僧みぢうら其  
紅葉の木哉。根際よて伐臥せてり。然れど良筭が使行で  
見るふ。木を伐てられど返て良筭より其由故云々せむ。彌  
噴りゆ。此間横川の慈惠僧正。天台座主とて。殿下の御修  
法して。法性寺小在れる。蓮花寺の僧木を伐るはく。小法  
性寺小急き参て。此由も座主より申れば。其時座主不肩  
を立ふる人無ゆ。是は大不噴りて良筭を召しより遣りる  
也。良筭我も山階寺末寺の司あ。何の故ぞ天台座主。我  
子心子任せて召べきぞと放言して。參りゆれど。座主彌

噴て。山代所司を呼下して。其故もて祇園の神入ら代人  
等れ延暦寺小寄ひる。寄文も書儲りて。其小判を加用よと  
押責れ。神人ら責あれ。佗て。判を加へて。其後座主  
今小於ては。祇園を天台山の末寺なり。早く別當良筭を追  
却す。隨しと云て追せり。良筭敢て事と爲せ。○公正。  
平致賴を以ふ兵の郎等とも。放雇ひ寄せて。楯を儲りて。軍  
を調へて待りる間。座主此由も聞て彌も噴て。西塔の  
平南坊といふ處小住り。睿荷と云ふも僧也。極きる武藝  
第一の者也。是より彼致賴が弟か。入禪といふ僧在り。極  
きる兵あり。此二人を祇園より遣して。良筭を追むる。此

二人彼處より至りて。良筭が儲かる軍兵に向て云く。汝ら濫  
小箭を放ちて悪事を致さば。後の爲子悪うざあむと誘ひ  
候子。良筭が雇へる致頼が郎等ども入禪を見て。早う山の  
禪師殿の御事處不あそ有りきを云て。後の山子逃去小け  
きは。心よ任せて。良筭を追却して々。然む脣荷な別當よ  
成して執行させりる。其後山階寺は大衆發りて。公家小  
訴へ申にやう。祇園を往古より山階寺の末寺あり。何でう  
恣ま延暦寺小押取らきむ。速よ本の如く。山階寺の末寺と  
為ゆき由を仰下さぬべしと。度く訴申りる程。御裁許付  
遅く承定られむ。山階寺は若き大衆京上して。勸學院み著

け。公聞食し驚きて。御沙汰有ベカリリ候ふ。其前小彼座  
主慈惠僧正失り。然て其沙汰明日有ベしと既不仰下  
されり。小山階寺の大衆を皆勸學院小在り。其寺比  
中筭は宗と此事を沙汰すべき者にて有ける。勸學院道  
小家小宿アリて居。其夕より方。前不弟子共あ  
ど數居。俄子中筭只今此ノ人來らむと。某達あは  
らく外に出よと云。候。弟子共みあ去り。候程。人外よ  
り入來候。も見えぬよ。中筭人と物語。候音の聞れ。れ  
弟子とも恠と思。程。暫許あひて。中筭弟子どもを呼  
り。皆出來正ける。中筭比。山の慈惠僧正は御。す

おると云けれど。弟子ども此を聞て。此を何小宣ふ事ぞ。慈惠僧正を早う失ふし人をはと思ひれども。怖くて物も云ひて止りたり。然て明る日此沙汰有けるよ。中算風發アリと云て沙汰の庭引出さりきば。山階寺の方よ。指せる由沙汰ち人無き。小依て。其御裁許せざりれど。大衆やも返下カタマクシあどして。遂に祇園也。比叡山比末寺小成畢さる也。由が良算が悪事よ。發する事あれども。此を思ふ。慈惠僧正は強く執せらる事ふこそ有ぬを。失ありれども。其靈の中算ふ乞請ヨシナフりれど。中算は俄ハムニ風發ハラフアリとて。出さり候ハタハタアリ。中算出て沙汰せましか。何うは有ハサま魔事あり。

し。然れど其故知て。慈惠僧正の靈も。行ハシケて乞請ヨシナフらるよ。中算是只今も非ざり。弟子共も此を聞く人も。皆知ハシメりと有ハサ。

陸奥國の女ハタチ。法華經を知らず歎ハシケり候ハタハタ。良源の白骨比頭ハタハタの舌はうで活ハツゐる。女ハタチ家の天井小來にて教ハレハレあるも。我執せよ。針貫ハリハリあまはし。草拂ハラフあどあく。此は何れ事ふ。尋ねれ。中あろ此里小猛將ハサウエイ。其女ある者。法華經を讀ヨシナフ。

そは西行法師ハシケが撰集ハシケ。陸奥國平泉郡捌といふ里。坂芝山と云ハシケ。山あ。其邊の河端ハハダク。高さ一丈餘。あら石塔ハタハタ。立ハサウエイ。針貫ハリハリあまはし。草拂ハラフあどあく。此は何れ事ふ。尋ねれ。中あろ此里小猛將ハサウエイ。其女ある者。法華經を讀ヨシナフ。

ありれど教ゆき者なしとて朝夕歎きて過りる。小或時天井の上より聲りて云やう。汝經を求めて前小おけ。我此小居て教へむと聞也。怪く思あがら。經を得て前より置りる。天井に上りてゆくし丸聲みて教へけど。八日と云うみれ習終止ぬ。此女いゝある態れらむと。最怪しく覺えて。天井を見協小。白く生き苔生する首小。舌は活くる人比如何ある有ゆ。此白骨の教よ麻よあそと思驚きて。此を誰みて御らむと。強引尋ぬるとぞ。我をこれ延暦寺に昔の住侶。慈惠大師の首あり。汝が志を感じて來て教さり。急に我を坂躉山に送りと有々れむ。哀よ添きあとみ覺えて泣く。此

山に納めて。此の如く塔婆あとせる。此頃までも山中。内貴妃御經は音も折も侍り。ちて此女を尼かあひて。此山中小菴を結びて。思にまして在しが。此二十餘年またみ往生しき。其菴は形今小祠見よと云ふ。彼人と伴ひて見る。口三間あ院屋の形をうり殘りゆと有也。此を良源法師のみならず。和漢の法師。舌のみ死せす。て經を讀誦。一處類をいと多うれど。一切法よ著せらる。法智魔と謂ふを。魔事ある物なや。序よ此方か此事の有し哉。尚記さば。古今著聞集は宿執篇。壹睿といふ僧有り。多年法花經よ帰して修し。宿間。紀伊國宍背山に至りて宿し。る。

夜よ。其人ミを見ミて。法花經スよむ聲聞えり。一部讀終フ。而經の聲止ヤシぬ。怪く思て。朝ア其程を見る。序經スる。白骨ハ。あと。更ア分散せミし。正體シれ續カき。其觸體シの中シ舌ハ。而ハ。壹膚觸體シ小向シひて。其因縁シ尋シぬ。舌答シて云シく。我ハあれ巖山の僧。名をは圓善と云シた。修行の間此山ヲ至りて大込ノ。前生ヲ法華經六万部讀奉らむと願シ起シして。生分ヲ既シ終シりふ。計らばシる小生ヲ隔ハ也シ。其願を誦シ満せむが爲シ。猶誦シるあり。今年已シ讀終りて。正ト兜卒ノ内院ヲ生シべしと云シ。壹膚此事ヲ聞て。禮拜シて去フ。此ノ如ク例多し。靈異記ハも。熊野山。金峰山アど。誦經シ。

觸體シ有リる由見シ。此等ヲみシ執シの深シき至ル。あゆシと見シ也。普信シテ。靈異記ヲ。阿部天皇の御世ア。紀伊國牟婁郡熊野村ハ。永興禪師トイフ僧ハり。人其行ヲ美めて。都ア南ア。國ノ人故シ。南菩薩ト稱シ。此ノ許モ來シ。仕シる僧ノ。山ヲ入シて行シ。む光ヲ以テ。麻繩ヲ二十尋メ。水瓶ヲ一口持テ。別去シ。二年後ア過スて。熊野村の人。熊野河ヲ上シて。山ヲ至ル。樹ヲ伐タ。アモ船ヲ作り。船ヲ聞ク。法花經ヲ讀音ア。月日ヲ累シ。小猶ア止マジ。貴く覺シて。山深ニ尋シぬ。小見えシ。還シりて。永興井ヲ云シ。方ハ。非怪シ。往シて聞ク。小聲ヲ。尋求シめて見シ。は一つの屍骨ヲ。麻繩ヲも。二足繫シ。巖ヲ懸シ。身ヲ投シ。

て死たり。其傍ヨタガ小水瓶あり。此をもて別去れる僧の歴事を  
知り。悲哭して還る。三年後ヘ遷て山人告云く。讀經の音今小  
止まにと。并まく往て其骨を取らむと將て。髑體を見れる。  
三年小至まで其舌腐カイ。宛然として生有りア。まく吉野金  
峰山カニ一禪師カニ。峰は行て行道を除クツ。往前小法華經。金  
剛般若經を讀む音あり。草中成排開き見れ。一の髑體あ  
リ。久しく歷て日小曝ササギ。其舌爛ダハれ。生著イツヅて有り。禪師  
そぞ淨處キヤトコロ。小取收めて。草を以て其上を葺覆フキカス。共に經を讀  
て六時より行道。禪師が法華經を讀むよ從ひ。共に讀む故  
小。其舌を見れ。舌振動カキマハ。すと有ア。此永興禪師が事は。今昔

貴物語集カモヒナシ。も見えア。そは靈異記を取れる。あ殊べし。猶言  
是カモ。今昔物語集。小春朝持經者。顯經驗語カモ。とある條。小今昔  
春朝と云ふ持經者有り。日夜法華經を讀誦して。樓を  
難不定して所々流浪して。只法華經を讀誦し心。人を哀  
劍みて。人の苦む事。或見ては。我が苦と思ひ。人の喜ぶ事を見  
ては。我が樂と思ふ。然る間。春朝遂小行き宿る。棲无スミカくして。  
一條は馬出の舍カス。下かして死より。髑體を其邊カニ。又有て  
取可棄。人无し。其後その渡カニ。人夜聞く。毎夜小法華經  
を誦カニ。音有り。其邊カニ。人等此を聞て。貴む事无限。然れど  
も誰人の誦カニ。と不知して。怪アレ。思ふ。聞カニ。或聖人出來て。

此觸體を取て深き山フカ持行ハシメテ置ハセリ。其後此經を誦ハセリ。音絕コマタニぬ。然れど其邊の人。此觸體ハタツボク誦ハセリ一けと云。事ハシメ知ルふり。春朝上人ハスヒトをば。只人ハシビト非ハシナ權者也。とぞ其時の人云。けると有るは甚ハシタよく類ハシメる事ハシメありかし。

靈異記ハタツボク。右の事ハシメが記せらる末ハシメ。諒ハシメ知大乘不思議力。誦經積功。驗德也。贊曰。貴哉受血肉身。常誦法華。得大乘驗。投身曝骨而觸體。中著舌不爛。是聖不凡矣。と云へき。ども悉く釋魔小率られ。いも宿執の為處。中ふも兩足を繫ハシメきて身拔投ハシメるは。謂ハシメ。あら如く殊ハシタ炳ハシタき。大乘ハシタ忌ハシタしき驗ある。是聖不凡。と貴妃事ハシメひ思ふ。佛者之心ハシメか正。異ハシメき物ハシメ無ハシメりり正。

然るは西行法師ハタツボクが撰集抄ハシメふも。慈惠大師のゆき首ハシメ。經韻ハシメ。此法事ハシメを記せらる未ハシメ。かゝる例ハシメりよ有難く。かき闇ハシメき。傍ハシメ心ハシメ地ハシメして。物ハシメを覚えべと書ハシメ。此法師も。佛法の事ハシメと。云子ハシメ。何ハシメとも歎き事ハシメ。も涙ハシメを落ハシメ。元すと泣頬ハシメ。此法師あれは。然ハシメも有ハシメべ妃ハシメ。此外の書ハシメ共ハシメふも。かゝる法事ハシメをばいを貴け。ふ記せらる。傍ハシメいと法事ハシメあり。然るよ著聞集ハシメのみ。此類ハシメ宿執篇ハシメ記ハシメして。由ハシメ歎き事ハシメを思へる状ハシメあ法事ハシメ。見高ハシメき。撰著ハシメ。あり。故ハシメ。物ハシメの哀ハシメを知ハシメ。顔ハシメして。撰集抄ハシメよ記せらる事ハシメ。どもを見せば。布ぞく。物ハシメも歎き出むとせらる。拙ハシメき事を

泣頬ナツラにて記し。名聞宿執あとの筋も。いを淨よく失ひ畢  
ある様サニ云へきども。宿執の心丸いと深くを有りる。其亡  
著聞集シテ是も宿執篇シテ西行法師出家より前も。徳大寺左  
大臣は家人みて有りぬ。多年修行のうち都へ帰りて。年ご  
ろの主君アリてあそん睡ヌクしさふ。公衡カタハシ中將の許モトへ尋タメ  
伺スルい見れど。縹ハダの白裡ホウリ比狩衣カイギヤ。お正物の奴ナニ袴踏ハミタマくみて。  
庭テハに櫻を詠めて。高観コウケンを寄居ヨリヤする状マツいと優モリくて。徳大寺の  
御跡アト。此人ヒト小御オシシりと思ひて。左右あく櫻の本シバと立寄タマシ  
されば。中將ナカシマいう形ガタの人ヒトかうと尋シマツられりふ。西行と申  
者の参アリて候と申スルれど。年ナシおろ見參アリすか正り候アリ所シテ

殊コト小悦ヨココロ給スルひて。椽の上アベ小呼コヒノホ上アベせて。昔今アラタニ事語モノシタられり。日  
やうク暮クレ下ルれど。西行は帰クりぬ。其後常シテ小参アリて物語  
あり。正アリかく旅程リョウジン。任大臣有アリと聞えり。正藏人頭マサニシロ。彼  
中將シマツ成スルべき仁アリ當スルり給スルひる。小院コウエンを中將成經シマツセイジ朝臣タケミを  
成スルまと思スル食シメし。殿下シテハシは大藏卿オカニシキ賴宗タケミコロ朝臣タケミ成經シマツセイジを  
む。兩闕室ツカニシマツも小叶アリふまじげアリ聞スルえり。西行聞スルて。いそぎ  
中將シマツの許モトみ詣スルで。其由アリを語スルりて。人ヒト越スルられ給スル。あは定スルめ  
て世アリを遁スルれ給スルむ。ばらむアリと申スル候アリ。中將聞スルて。誠アリか  
ある。有アリきアリきアリども。母尼堂ムニドウを立スルべき願アリ有アリて。其間アリの事を申  
付スルく。出家スル身アリて口入スルせむ事アリ。勸化アシカシ法師シテハシ小似アリさらむアリずれ

は。其願とげて後ふ計ふべしと答へきけれど西行心もと  
として帰りぬ。任大臣の於いで小聞えしが如く。成經朝臣  
藏人頭小補せられあり。其朝西行弟子を中將の許へや  
りて。若モヤとて事がらを見せり。敢て日來ニ替る事無  
アリ。又ふみを持て申候。事をいふと尋。アリ。承  
小見參れと。委く申べしと返事せられり。ば無下の人  
にて御りめ。其後を向はゞ成小り。世ま道れ身を捨  
あれども。心を昔小かはら。達くし有けるなりと有り。聖  
人鬼はあれども。五蘊六塵の宿執魔縁を去敢ざるあとは。  
是をもて知べし。

内々上より舉くる四大師を更あり。巖山の中興と稱れし人考  
ら。右小記す如く。憍慢宿執。名利勝他は麿念淡。有しうば。其末  
派門葉の僧徒は。魔縁を引ざるは。一人も有はじたこと。前小  
記せる道昭法師。が靈の語。天竺震旦本朝。名を得る貴  
僧高僧は。魔道より落する類を。勝て計ふ。隨うら。と。言ひ。下より  
舉る閻發源大夫住吉と名告ゆる鬼の語。小諸宗の宜しき法  
師を。皆天狗よ成ゆる故。其數を知らず。大智は僧を大天狗  
と。あり。小智の僧を小天狗と。あり。無智の僧を畜生道より墮  
六十餘州。山峰より。或は二三十人。或も五十百二百人。天狗の  
集らざる處。あし。と言へる。う思ひ合せて辨ふ。考し。

あの開發源大夫住吉といふ物の語也。第四卷小そせ全文  
六を引て論ふを見るべし。

抑<sup>テ</sup>大智は僧の大釋魔と成<sup>ル</sup>。小智は僧の小釋魔と成<sup>ル</sup>。人な  
誰惑し。世を騒亂せしむる事は。上にも下にも記し辨ある如  
くあるが。謂<sup>ハ</sup>無智の僧は。畜生道より墮<sup>ハシ</sup>るは。多く屎鳩を  
成りて。是も<sup>レ</sup>釋子は因を引き。隨分の幻果を得て。種々の變  
相を現じ。世をも人成も誰<sup>ナフ</sup>うき物<sup>ヲ</sup>有りる。其もまた鳩と  
鳩とは一類の物<sup>ヲ</sup>。鳩ハ鳩の大き<sup>ク</sup>猛<sup>タケ</sup>き物<sup>ヲ</sup>。鳩ハ鳩<sup>ハ</sup>小さ  
く<sup>ハ</sup>けき物<sup>ヲ</sup>。形も類<sup>ハシ</sup>る故<sup>ル</sup>。古くは鳩<sup>ハ</sup>鳩とも云へり。然  
而も神世<sup>ハ</sup>天日<sup>ノ</sup>鷦<sup>ノ</sup>鷯<sup>ノ</sup>翔矢命といふ。鷦<sup>ハ</sup>を掌給ふ神を聞え。始

終て弓を製<sup>ス</sup>。弓削氏の祖ある謂<sup>ハ</sup>小よりて。矢小<sup>ハ</sup>鷦<sup>ノ</sup>羽<sup>ヲ</sup>用  
ある<sup>ハ</sup>。天照大御神は。天岩屋<sup>ノ</sup>小幽居<sup>シ</sup>。時<sup>ニ</sup>弓六張<sup>ヲ</sup>並<sup>ベ</sup>  
て琴<sup>ヲ</sup>と成<sup>ス</sup>。其子長白羽<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>小奏<sup>シ</sup>め給<sup>ヘ</sup>。其時<sup>ニ</sup>金色の鷦<sup>ノ</sup>  
高幡<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>居<sup>ア</sup>リと有<sup>ル</sup>。やがて天日<sup>ノ</sup>鷦<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>暫<sup>ハ</sup>化<sup>メ</sup>ると  
通<sup>ハ</sup>せば。鷦<sup>ハ</sup>あゆ<sup>ヘ</sup>き<sup>ム</sup>。鷦<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>は。形の類<sup>ハシ</sup>れを言<sup>フ</sup>は<sup>ム</sup>。  
て。此縁<sup>ハ</sup>小よ<sup>ム</sup>て。天日<sup>ノ</sup>鷦<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>。天金鷦<sup>ノ</sup>命<sup>ヲ</sup>も申<sup>セ</sup>。

琴<sup>ヲ</sup>彈<sup>ク</sup>上<sup>ニ</sup>金色<sup>ノ</sup>の鷦<sup>ノ</sup>と化<sup>メ</sup>て來<sup>ヘ</sup>。あれ鷦尾琴<sup>ヲ</sup>を製<sup>ヘ</sup>る  
事<sup>ハ</sup>本<sup>ハ</sup>あり。また<sup>ハ</sup>神武天皇は。大和國<sup>ヲ</sup>征<sup>イ</sup>入り給<sup>フ</sup>時<sup>ニ</sup>金色<sup>ノ</sup>  
の鷦<sup>ノ</sup>御弓<sup>ヲ</sup>弭<sup>ヒ</sup>止<sup>メ</sup>と有<sup>ル</sup>。天日<sup>ノ</sup>鷦<sup>ノ</sup>命<sup>の</sup>化<sup>メ</sup>る<sup>ハ</sup>。あて。鷦<sup>ノ</sup>  
ある<sup>ハ</sup>多く覺<sup>ム</sup>。然<sup>ニ</sup>古史傳<sup>ヲ</sup>委<sup>ク</sup>考<sup>ヘ</sup>記<sup>キ</sup>を見<sup>ヘ</sup>。

但し此を神の御態あるを。釋魔の鷲<sup>アヒ</sup>形を現じ。さほも。寶物集小。東大寺<sup>ル</sup>一一番の別當。良辨僧正も。相模國の人也。三歳れと。父母懷き出して愛せるを。金色ある鷲來りて。抓<sup>ハシマサ</sup>去りぬ。父母悲むと云へども。空<sup>ソラ</sup>小消えて失せぬ。鷲ハ大和國春日山ある。木の空<sup>ウ</sup>小置て是を養ふ。此子日<sup>ハ</sup>歷年積<sup>トシツモ</sup>て。物の心付く程小。佛法を修行す。人是を金鷲仙人<sup>スカイセンジン</sup>也。名付く。

此事今昔物語。古事談。佛法傳通緣起。あと小見えて。金鐘行者ともいゆ。はと元亨<sup>ル</sup>。釈書小も。良辨姓百濟氏。近州志賀里人。其母祈觀音像而得<sup>リ</sup>。二歳時母桑焉置兒於樹陰。忽大鷲落<sup>ハサウエ</sup>捉兒而去。母悲望<sup>レ</sup>。趁鷲而往。不帰<sup>ラ</sup>家。初南京義淵詣<sup>ル</sup>。春日神

祠見鷲鳥于野<sup>ヲ</sup>。將小兒也。鷲見人而避<sup>ム</sup>。淵收而歸<sup>ル</sup>。甫五歲就學。聞<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>。十云<sup>く</sup>と見え。まゝ大山緣起と云<sup>ふ</sup>。良辨者相摸國鎌倉郡由伊鄉人也。俗姓漆部氏。當國良將塗屋太郎大夫時忠子也。母未<sup>タ</sup>聞也云<sup>く</sup>。時忠年汨四十無胤子。遂就幽冥申禱<sup>ス</sup>。是或夜夢有一高僧來告曰汝所請求我哀之。授一卷亦曰立我是靈山釈迦妙典弥勒菩薩也。時忠夢中嬉懽甚即披而升<sup>ル</sup>。閱之法華經第一卷也。如言告妻。妻曰今夜妾亦夢<sup>ム</sup>夢狀相同無違矣。夫婦感夢知其有子。既而有身。遂生一男。父母以爲匪。凡人育之。鍾愛尤切。歷五十日。乳母提携遊觀園中。金色鷲不意飛來。摯其兒入雲矣。云<sup>く</sup>とあるを以て。金色鷲の佛魔あ

る事を知る。行囊抄。此全文を引き。古き書と見  
え。是も。多く同書。相傳曰。父、大住郡三宮大明神是也。母、則

號易産大明神とも云ひ。

仙人さけみ木の空ふて。佛法を修行す。非也。一堂を建  
立せむと思へども。私力不足にて叶ふくも無なり。是は公家より  
申ぬ事も思ひ。奉公無てをいひて。天聽を驚かすむと思  
ひて。南無聖朝安穩といひ。稽首り。法聲。聖武天皇の奈良都小  
御座り。頃ある。隱あく聞えけど。まあ金色の光。春日山より  
來りて。禁中を照らすと見る人あり。はと春日山。弥勒光を  
放ちて御座と。多くの人は夢尔見也。

此を金鷲行者は弥勒の化現といふ事。故普く人不知しめ  
て。世不通用ひられむとして。行する幻術の夢あり。佛者れ多く  
くあれ所為にて。上小引ある大山古縁起。小も。良辨を弥勒  
と云ふ事。是故天皇勅使を遣して。仙人を召て。故よ問給ふ。仙人願の  
有狀を申す。天皇德小帰して。一堂を建立し。給ふ。今。東大寺  
是ありと有て。此不思議ともは。凡て佛法の異驗よて。金色の  
鷲やがて釋魔ありし故。良辨よ木の空。小養ひ。幻通を教り  
て聲を違音。響か。光を放ち。夢を見せ。是の異驗  
を現はし。天聽を驚かし。奉れる。是を釋魔の鷲比形を現

せしる始れる。

般を此事は。巫學談弊。東大寺建立は事を論へる處。小委  
く辨へられ。此ノハ大畧を云。あり。義楚六帖。西域記。云。  
是靈鷲山似鷲鳥。有靈多集。故名靈鷲。峰聳類臺。故云鷲臺山。と  
いひ。また法顯傳。祇闍屈山有大石室。阿難入定魔化。爲鷲  
鳥來怖。阿難と云ふは。由有けある事。又。また名義集三卷  
よも。常在靈鷲山の事を云へき。披き見るほし。因ス云ふ。  
抱朴子廣譬篇。小金鶴不競擊於小鶴。とあり。和名抄。唐韻  
云。鶴大鵠也。鶴鷲鳥別名也。山海經注云。鷲小鶴也。鵠和名於  
保和之。鷲古和之と有れ。此金鶴も黃金色の鵠を言。る。

他。漢籍小字。此熟字未見當ら。猶考ふべし。

あゝ同書。慈惠僧正。金色は天狗と化。正を云すも。金色  
の鷲は形を云へ正と聞。其を雲景う未來記。崇徳天皇の  
御靈の御形。金色は鵠の形。見成し奉ね。思ひ合せて  
辨ふ。是まゝ鷲を鵠とも見成。一證。と考べし。し。鵠  
は正しく。佛菩薩は縁。有る事を知。は。今昔物語集。大和  
國平群郡。鶴村。岡本寺といふ寺あり。尼の住むる寺あり。  
此を聖德太子の宮。正し。太子誓願を發して。尼寺と為  
給へゆ。靈異記。小見え。正。

其寺小銅の觀音。比像十二體あり。而も小聖武天皇の御世。小

彼像六體を盜人スズビト小取られぬ尋求タチモトむれども得矣。其後程ホドを経て。其郡北驛の西方ツバヤに小き池あり。夏のあう其池の邊ホトリよ牛飼ウシイの童部ワラベとも在り。池中より小木指出サシテ。其木下鷦居カツリ。此事靈異記ルイキにも載せて。鷦を鷩アヒまゝ鷩アヒまゝ鷺アヒふど誤れ。さゞ本草綱目ソクダウ云く。鷦似鷹而稍小也。其尾如鷲。極善高翔。專捉雞雀。其攫物如射アサシと。寺嶋良安云く。鷦鷩アヒ有害無益。而多有之鳥爲人所憎也。然俗傳曰。愛宕之鷦。熊野之鳥。以為神使。未知其據也。といへど。良安鷦と鷩也。共々惡鳥云ヘキども。二鳥共々惡アヒき中ハシマも。はゞ世の爲人也爲とある事も。有空覺オホあるを。其を此不言はゞ。惜まゝ鷦と鷩也は甚ハシマも中

悪く鷦の鳶アヒを責むる事は。淡き由有タガげある事タガ定。童部アヒれを見て。礫塊アヒレブあと拾ひて打アサシか。鷦去らアヒタマて尚居ナホ。然きは童部アヒ投打アサシ殺事を止アヒタマて。池アヒ下アヒタマて鷦を捕アヒタマへむ。そひ多小鷩忽アヒタマ失せて。居アヒタマりる木を取アヒタマり有り。其木をよく見れた。金の指アヒタマす有り。童部怪みて。此を取アヒタマて奉アヒタマる。觀音アヒタマ銅像アヒタマれ。童部アヒの陸アヒタマ下アヒタマりて。里人アヒタマ共アヒタマ來て見る。岡本寺アヒタマの觀音アヒタマれ。塗アヒタマる金を皆拂落アヒタマす。尼アヒタマとも觀音アヒタマを圍繞アヒタマして泣悲アヒタマみ。忽アヒタマよ舉アヒタマを造アヒタマて。本の岡本寺アヒタマ渡アヒタマして安置アヒタマしり。其邊アヒタマ道俗男女アヒタマ集アヒタマり。禮拜アヒタマして。錢アヒタマを鑄アヒタマる盜の態アヒタマあらむと云

ひき。此を思ふ。彼池カ有り鷦カ。實は鷦カ非カ。觀音の  
鷦カと變じて示し給カり。と有を見て知べし。此事靈異記カ  
も載カれ。見合せて記した。撰者の評カ。彼池カ有り鷦カ。  
實の鷦カは非カ。觀音が變じて鷦カと成カる也。とあはえ違カへ  
定カ。然るを觀音と云カ。元より有名無實の佛ある。其靈驗あ  
る事は釋魔の態カある。彼池カ有り鷦カ。此觀音像カ憑カ  
て。其驗を示する釋魔カ。眞の形を現して。盜人の爲カ。池カ隱カ  
られて在る由カ示せん。觀音の靈驗といふは、皆こ此類  
あり。かく論カふをも。疑カむ人は為カはれ。源平盛衰記  
小。文覺を渡邊黨カ。遠藤左近將監盛光カ一男。上西門院の北

面の干膚あり。其母いまゞ子なし。夫妻共は家の絶カあむ事を  
歎カきて。長谷寺の觀音カ詣カて。七箇日祈カ申カれ。左の袖カ小  
鳩カ羽カを給カると夢カ見て。懷妊カして儲カける子あり。父を  
六十一。母を四十三カで生れカる一男あり。

觀音は天狗カあると元より乞カは。其一羽カ別カりて。ま哉  
志カ子カは魂カとは爲カせるあり。

母は難産して死ぬ。三歳の時父盛光も死ぬ。十八歳みて。糸惜カ  
き女カ後カれて髪カをき。日本一州の高き峰至らぬ地カ。あくカ七  
日。二七日。三七日。百日籠カり行カ。十八歳カて出家カ。一十三  
年の間。山臥修行者の勤苦カ。此文覺を。天狗の法成就カ人

ふて。法師をば男小あー。男をば法師小おしあどして。現心は無りんれども。やゝし犯荒行者みて。度々鍔金顯しきる者ふ。心志ふせく。身も健ふちて。立ぬ願もあく。せぬ業もなし。斯ゆりれば。發心地物氣れど云々。請用隙れし向と向ぬる小空あき事をれし。餘りふ暇あき折は。念珠袈裟を遣して。病者の目ふも見せ。手ふも取せぬきむ。忽よ驗を顯む。

六觀音は右う云如く。有名無實の物あれど。そきが靈驗とて種々のこせみは。邪魔の觀音と假定て有る故あり。然るを是が父母。その後胤は絶むことを悲みあむか。神を祈るばきあとあらか。觀音を祈れるは。時世の状れきばいふ

・小あらゆど。觀音もし善心のもの形らむか。其願のあとく。家を繼べき子を授く。ほき小天狗を授て出家せしめ。家代継子絶ざるは。いふ小天狗代枉する所為あらばや。

係をしかむ。元來天狗根性ある上。慢心強く高聲多言ふし。人をも人とせざり協餘りふ。法皇の御所があはれて。獄小入らきふ正れき。悪口止む。遠くは三年。近くを三月が中。思ひあらせ申さむ。三寶護法と正く。利生を現し給へ。と手合せ念珠を操て。院御所を呪詛し奉正り。小獄中れ者共も。身の毛豎て覺り。ちまちまや上西門の女院。指する御惱をほしまゆ考して。隠れさせ給ひ。より正。斯て文覺を院御

所にて惡口を吐き流罪せられ。伊豆國奈古野が奥と云所。  
觀音堂ある。奈古野寺と名く。其傍小祠やし祀菴を結ひて。  
閑籠りて年月送り。深く大悲れ誓願を憑みて不退の  
行法薰修せりと見え。まさしく天狗の鷦と化き正と  
いふ事も。同集小讃岐國より能池といふ極めて大なる池あ  
リ。其池より住る龍日小當らむと思ふ。池より出て人  
離する堤の邊。小蛇の形にて蟠り居り。正。

龍の大小變化自在ある事。和漢の書等にも記し傳へ。今  
も目はあり。小蛇と見ゆるが。大龍と成りて雲を起し。冰  
を降し昇天夢を見る人。いゝ程も有。然れど心狹き漢

學者は得知らて。然る事なしと思へ。

其時近江國比良山に住り天狗鷦の形とて。其池の上  
を飛廻る。比小蛇蟠りて在處ま見て。鷦返下りて搔みて。  
遙か空より昇る。龍力強き物あれとも思ひ。程小。俄よ抓れ  
ぬれも更小術盡て。あらず抓きて行くが。天狗小蛇を抓碎きて  
食はむと為る。龍も力強き小依て心不任せて抓碎こと能  
らずして遙本の栖比良山に持行て。狹き洞の動きくも  
非ぬ處打籠置かれ。龍は一滴の水も無れ。空を翔る事  
も叶はず。破死て只死あむ事を待て居る。

龍の神通自在あるも形をかく小さく變じては。其變じと

る形の量あらでは。用を成あと能むべかく怯みて苦み居  
あそいと墓无れ。説苑とのふ漢籍よ。伍員が吳王小云け  
ぬも龍比魚の形小ありて浪よ戯れて浮りる程。預諸と  
云もの。網を引ひるよ懸りて悲し丸目を見て大海よか  
鳴へて龍王小訟へけきは。龍王ことわきて云く。何しふ  
く魚比姿とは成りぬ。然れどあそ網小もかゝき。今よア然  
所事を考はしき也と云へる事あり。虚實ハ知ら承ど。豐臣  
太閤小曾呂利も鬼神の夢よ託して諫めし言をも思ひ合  
其せて。人を無下小品をも落すまほしき物ありりと。  
而る間。彼天狗比叡山よ行て短を伺ひて。貴き僧を取むと

思ひて。夜東塔の北谷小在り處。高き木う居て伺ふ程。其向  
小造懸する房ある。其房よ在る僧。様よ出て小便よあて。手洗  
洗ちむう爲ふ。水瓶を持て手を洗ひ居る。此天狗木よ飛  
來て。僧を搔拵みて。遙々比良山比栖あ處洞モリを行て。龍の在る  
處。打置於僧え水瓶を持あから。我かも非て居よ。今を限  
と思ふ程。天狗は僧を置て去ぬ。

此所行を具。思ふは。本文小鷦とも有れど。あ。鷦の所行  
あり。舊く鷦と鳩とを混じ云へる。此。も。悟。べし。  
鷦を人よ拋み去ア。碎食ふ程の事は。あき物みて。鷦こそ  
其然るにと常ふあるをや。

其時小暗き處より音有りて僧小問云く汝もこそ誰人を何よ  
り來そと問ふ。僧答て云く汝もこそ誰人を何よ  
為ふ。坊の様よ出たりるを。天狗俄よ执み取て將來む。あ  
已然れど水瓶を持ち來るを。抑かく云ふぞ。まゝ誰  
そ思云下答云く我を讃岐國万能池に住む龍あり。堤より這出  
ありしを此の天狗空より飛來て俄よ执みて此洞小將來れ  
て狭くて為む方あく。一滴の水も無れど空房も翔らぬと云  
ふ。僧云く此持くる水瓶よ若一滴の水や殘さらむと云へむ。  
龍此を聞いて喜んで云く我此處にして日來經て既より命終あるむ  
と為る。幸小來會し給ひて互より命を助くる事を得べし。若

夫滴の水あらば汝よ本の栖子將至るべしと僧も喜て水  
瓶を傾きて龍を授く。一滴許の水を受ける。龍喜びて僧よ  
教へて云く。努力怖る事无にて。目は塞きて我よ負れ給ふ  
傍。此恩更小世くよ忘きじと云ふ。爰よ龍忽て小童の形と  
現すて。僧を負て洞を蹴破て出る間小雷電霹靂して空陰  
り雨降こと甚恠。僧を身振ひ肝迷ひて怖しそと思へども。龍  
も睦ひ思ふ故。念じて負れ行く程よ須臾小比廢山の本  
坊小至る。僧よ豫よ置きて龍を去ぬ。

龍の人語を成せる事を漢學者の見狭き倫を疑ふも有へ  
りき也。神小入るときは物とて人語を成さるはあたを。

より人のみを物と語を通するあと能ぢば。此をよく古學  
號して辨ふべし。はゝ龍の水を得ては其自在かくせ如く。

水を失ひてそ。怯きあと蛇小異あらば。

彼房の人も常の霹靂して房も落懸ると思ふ程。俄小坊の  
邊暗夜は如く成て暫許ありて見れど。一夜俄小失。よし僧様  
も在。坊の人奇異く思ひて問ふ。事の有様を委く語る。人  
皆聞て驚き奇異ケリ。其後。龍彼天狗は怨。報せむ爲  
ふ。天狗を求むる。京小知識を催。荒法師の形と成て行  
は。龍降きて蹴殺して。然れど翼折る。屎鷦ふてあむ。  
大路小踏れり。龍を僧の徳小依て命を存し。僧を龍の力小

依て山小返る。此も機縁あるに。此事は。彼僧の語傳を聞繼  
て。語正傳へ。隙ありと有正。

但し此物語。僧の房小返正する迄の事を。僧は語多。みて  
知らるれども。其後。龍の天狗を蹴殺しき。事は如何。お  
て知りむ。此も雷電霹靂して。荒法師も蹴殺しある。古屎  
鷦と成て大路小在り。彼僧は物語り小思ひ合せて。か  
く語正傳へし。亦然耳。

はゝ天狗の正。佛と現じる事も。同書小。延喜。天皇の御  
代。五條は道祖神の在る處。大。ある實成らぬ柿木有り。其木の上。俄小佛現。ちれ。隙事有り。微妙。光を放ち。様

様の花を令降ふどにて極めて貴かとられむ。京中の上中下  
人詣集るあ空限ふし。車も去敢えかく喧るやど。既小六七  
日小成りぬ。

此う據アリて思ひ合さぬ事アリ。其尤万葉集よ。玉葛實成  
らぬ木小は千早振。神そ故くと小ねらぬ木おとふ。生有る  
は。かゝる事を詠るあり。實那らぬ木とは。棗栗桃。などの類  
の。實は成べき木うて實那らぬを云ふ。然れど實の歌る也。  
此樹ども比常ふて成傍き實の成らぬを變あり。其常あら  
ば變ある。則妖魅の託く所あり。此歌も正しき神の事小  
さ非矣。鬼魅の類ひを云へるなり。其を千早振と有るうて

も知べし。此を人の解得ケタ事ある故小少ろ注し般斯  
有れむ。然る木ども有あむふも速よ伐弃べき事小る。

其時小光右大臣也云。人ゆ。深草の天皇比御子あり。身ヤ賢  
く智明ある人ふて。此佛の現じる事を頗る心得。思給い。  
實の佛也。木末よ出給ふ。瘞き様ある。此を天狗などの所為よ  
ある。有めき。外術を七日不過。今日我行。て見むを出立給ふ。  
外術とは外道の術といふ事よて。佛法より外術をいゆ  
語あり。大論小委しく見えより。

裝束直く。て檳榔毛の車よ乗て。前駄あと直しく具一て。其  
處小行給は。若干詣集れる人を拂ひ去させ。車を擡下し。轔を

立車の簾を巻上りて見給へむ。實小木末より佛在り。金色の光  
を放ちて空より様々の花を降すこと雨の如し。見小實より貴  
きあと限るし。而る小大臣はこむる。恠しく覺え給ひりれど。  
佛小向ひて目滅も瞬りにて。下時をうり守正給けりば。此  
佛暫くあそ光を放ち。花を降しあどり。強守る時小。侘  
て忽よ大。ある屎鴉の翼折る小成て。木上より土よ落てふ  
ゝめくを。多くれ人此を見て。奇異ありと思ひ。小童部ども  
寄りて。彼屎鴉を打殺してけり。

和名抄云。本草云。鷗一名鳶。和名土比。爾雅注云。鳶一名鷺。喜  
食鼠而大目者也。漢語抄云。久曾止比とあり。寺嶋良安云く。

鷺狀似鳶而羽毛疎飛翔不能。但攫牛馬枯糞或魚物鳥  
雛食之と云へ。此字馬屎鳶とも云ふ。常の鳶よども稍大  
小。羽毛疎ひて汚く憎きげ様しきる古鳶をいふ。然れど常  
の鳶と處を異かず。殊非共小交じて有が中小。稍形の  
異なるれば合類節用ふ。鳶字まゝ鷺字れどをクソヒ  
ビと訓み。戴勝をマクソツカモモモ。グソトビモモモ有り。猪  
はまと馬屎鷺とのふ物あらず。此を屎ある攫め。鷺の類みて。鳶  
とを異あり。寺島氏あを鷺と。同じ物小記せらるは誤あり。  
大臣は然れどこそ。實の佛は。何故小。俄不木末小を現し給ふ  
法也。人の此を悟らばして。日來禮み。皇るが愚ありと云ひ

返<sup>カヘ</sup>正<sup>カヘ</sup>給<sup>カヘ</sup>ふりア。然れど其庭の若干<sup>ハ</sup>人ども。大臣をあむ讃<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>る。世人も此を聞<sup>カ</sup>て。大臣は賢<sup>カロ</sup>う正<sup>カヘ</sup>りる人哉と。讃<sup>ハ</sup>申<sup>ハ</sup>る  
と見え。

身<sup>シノザエ</sup>玄<sup>マコト</sup>實<sup>マコト</sup>小賢<sup>マコト</sup>き大臣<sup>マコト</sup>ふを御<sup>マジ</sup>りる。然れど爾<sup>マタ</sup>を實<sup>マコト</sup>の佛<sup>マコト</sup>をい宅<sup>マツ</sup>貴<sup>マサニ</sup>くて。木末<sup>マツメ</sup>あ。と<sup>ト</sup>子出<sup>マツキ</sup>き物<sup>マコト</sup>ふ非<sup>マナガ</sup>ず。也思<sup>マタ</sup>もれ<sup>マタ</sup>由<sup>マタ</sup>ある  
は。實<sup>マコト</sup>の佛<sup>マコト</sup>も眞<sup>マトト</sup>小<sup>マコト</sup>。屎<sup>クソ</sup>鷄<sup>トリ</sup>の大き<sup>マツコト</sup>。殊<sup>マタ</sup>幻<sup>マタ</sup>通<sup>マタ</sup>を得<sup>マタ</sup>ある物<sup>マコト</sup>  
も思<sup>マタ</sup>もれ<sup>マタ</sup>ざ<sup>マタ</sup>流<sup>マタ</sup>ハ。甚<sup>マタ</sup>惜<sup>マタ</sup>き事<sup>マタ</sup>ある。此事は宇治拾遺物語<sup>マコト</sup>小<sup>マコト</sup>  
も見え<sup>マタ</sup>とき<sup>マタ</sup>は。合<sup>マタ</sup>せ見<sup>マタ</sup>て舉<sup>マタ</sup>り。

は<sup>ト</sup>十訓抄<sup>マコト</sup>。後冷泉院の御時。天狗<sup>マコト</sup>あきて。世<sup>マコト</sup>中<sup>マコト</sup>騒<sup>マコト</sup>ぐし有<sup>マタ</sup>け  
る頃。西塔<sup>マコト</sup>より住<sup>マタ</sup>む僧<sup>マコト</sup>。白地<sup>マコト</sup>。小京<sup>マコト</sup>にて歸<sup>マタ</sup>りむ。東北院の北

比太路<sup>マコト</sup>小童部<sup>マコト</sup>五六人ば<sup>ハ</sup>り集<sup>マタ</sup>りて。物<sup>マコト</sup>を打<sup>マタ</sup>領<sup>マタ</sup>しりむを歩<sup>マタ</sup>み  
寄<sup>ヨリ</sup>て見<sup>マタ</sup>れぬ。古<sup>マコト</sup>鳩<sup>トリ</sup>の世<sup>マコト</sup>小<sup>マコト</sup>怖<sup>マタ</sup>し氣<sup>マタ</sup>ある。或<sup>マタ</sup>縛<sup>マタ</sup>り搦<sup>マタ</sup>めて<sup>マタ</sup>梯<sup>マタ</sup>下<sup>マタ</sup>打<sup>マタ</sup>  
り<sup>ト</sup>。而<sup>マタ</sup>あ忌<sup>マタ</sup>じれど如<sup>マタ</sup>此<sup>マタ</sup>ち<sup>ト</sup>そと云<sup>マタ</sup>是<sup>マタ</sup>は殺<sup>マタ</sup>して羽<sup>マタ</sup>を取<sup>マタ</sup>らむ  
と云<sup>マタ</sup>ふ。此<sup>マタ</sup>僧<sup>マコト</sup>慈悲<sup>マタ</sup>を發<sup>マタ</sup>して。扇<sup>マタ</sup>を取<sup>マタ</sup>せて。此<sup>マタ</sup>を乞<sup>マタ</sup>取<sup>マタ</sup>て放<sup>マタ</sup>ち遣<sup>マタ</sup>れ<sup>ト</sup>。  
主<sup>マコト</sup>世<sup>マコト</sup>の諺<sup>マコト</sup>。小太郎坊<sup>マコト</sup>も鳩<sup>トリ</sup>と成<sup>マタ</sup>ては。鳩<sup>トリ</sup>の智慧<sup>マタ</sup>あらで<sup>マタ</sup>れ<sup>ト</sup>。  
也<sup>ト</sup>云<sup>マタ</sup>ふ事<sup>マタ</sup>思<sup>マタ</sup>か合<sup>マタ</sup>さる。は<sup>ト</sup>上<sup>カミ</sup>云<sup>マタ</sup>る万能池<sup>マコト</sup>は龍<sup>マコト</sup>の事をも  
嘗<sup>マタ</sup>思<sup>マタ</sup>ふ<sup>ト</sup>。此<sup>マタ</sup>鴉<sup>トリ</sup>を大<sup>マタ</sup>じに天狗<sup>マコト</sup>ありし<sup>ト</sup>。も鳩<sup>トリ</sup>と化<sup>マタ</sup>て捕<sup>マタ</sup>  
らましうば。りく怯<sup>マタ</sup>う正<sup>カヘ</sup>り。また此事。里人談<sup>マコト</sup>。本朝語<sup>マコト</sup>  
忌<sup>マタ</sup>。も功<sup>マタ</sup>徳<sup>マタ</sup>造<sup>マタ</sup>れ<sup>ト</sup>。也<sup>ト</sup>思<sup>マタ</sup>ひて行<sup>マタ</sup>わづ<sup>マタ</sup>。切<sup>マタ</sup>堤<sup>マタ</sup>のあざ<sup>マタ</sup>。敷<sup>マタ</sup>

正異様ある法師の歩み出て。後れじと歩き寄られ。氣色覺えて。傍カタマリ小立よひて。過さむと為り。小彼法師近よりて云。やう御憐アレみを蒙カウりて。命生イナキて侍れ。其悅聞えむとてれど云。小僧立帰りて得シテそ覺え。誰人シテ小うと問シテれ。然シテそ思シテらむ。東北院の北キタ大路オホシロにて。幸カハた目見て侍シテる老法師シテ侍スル。生者イハヤを命メイ小過ハヤシする物モノあし。斯ハシばう正トコトコの御志モチ小は。争ハサハサでう報ハサハサ申シテぐらむ。何事シテ小ても念比ハシあ。御願モチあらむ。一事叶ハシ奉スルらむ。己ハシもう認シテ知シテらせ給シテらむ。小神通シテを得シテれば。何シテ尤ハシ叶ハシへざらむ。已ハシと云シテふ。淺猿ハサミく珍ハラハラある態トコトコうあと。六ロクく思シテあづら。細ハシやハシ小云シテす。様シテこそ有シテらえと思シテひて。我シテ此世シテの望更ハシ小取スルし

年七十小成れ。正然シテきは名聞利養リヤウハ味氣アリれし。後世こそ恐ハシしきとも。其シテいりての叶シテ給シテふ。きシテあきは申シテ及シテば。但シテし釋迦如來の靈山リョウサンふて。説法シテし給シテいりむ粧アラモトひシテあ。感シテかりり免シテと思シテい遣シテられて。朝夕心シテ不懸シテりて。見シテま欲シテく覺シテやれ。其シテ有シテ状シテをシテあシテびて。見シテ給シテあむやと云シテへは。最易ハシき事モノあり。然シテ様シテの物モノ效シテくるを。己シテが德シテと為シテる仰シテりを云シテいて。下シテり松シテの上シテは山シテ具シテして上シテりぬ。あはし目シテがふさシテて居給シテへ。佛シテは説法シテの御聲シテ聞シテえむ時シテ小目シテ放シテむ。開シテ給シテ。但シテしのれ畏シテこ貴シテしと思シテえ。信シテをだシテ小發シテし給シテはぐ。己シテがもめ惡アレからむと云シテひて。山シテの峰シテの方シテ上シテる。

天狗トカゲ此言をよく思ひて。世アリ佛井の靈驗アリ天上極樂地獄アリと云ふ處アリも人アリ見ゆれど。釋魔の變現アリ止マサニる時のあや小せむやて取アリて其由下文アリを見て知べし。とはうどして說法の御聲聞えりきは。目アリ見開アリふ。山アリ靈山アリ。池アリ紺瑠璃アリとあり。木アリ七重寶樹アリと成アリ。釋迦如來獅子の牀アリ上アリかはし坐アリ。普賢文殊左右に座アリ。菩薩聖衆雲霞アリの如アリし。帝釋四天王龍神八部所アリ取アリく充滿アリ。空アリよア四種比花降アリめて香アリした風吹き天人雲アリ列アリふ。微妙の音樂アリ奏アリば。如來寶花小座アリして甚深の法門を演説アリし。其

事アリがら。大りアリ心アリも言葉アリも及アリば。暫アリこそ甚アリしく學アリひ似アリせよりあど。興有アリて思えりれ様アリの瑞相アリ見る。小在世アリ說法の砌アリ小望アリめるが如アリし。信心忽アリ小起アリて。隨喜の涙眼アリ浮アリび渴仰の思アリ骨アリ小徹アリる間手アリを額アリよあく。歸命頂禮アリする程アリ。山夥アリしくはら免アリき。騎アリまで。有アリる大會かき消アリ如く。失アリせぬ夢アリ。覺アリるが如アリし。あは如何アリ小あがる事アリそと。忙アリき騎アリきて見廻アリせむ。是と有アリる山中草深アリ。淺猿アリあがら。然て有アリ。きあら孫アリは山アリ上アリ。水のみ比程アリて有アリる法師出來アリて。然をうど契アリきる事を違アリへ給アリて信アリを發アリし。給アリへる小依アリて。護法天童アリ降アリて給アリいて。何とぞ斯アリばうとの信者アリをば。詭アリうほアリぞとぞ我等アリを

責ナガメミ給へる間。雇ヤトひ集ヤル。法師原も。うらき肝潰カモツツして逃去。而  
ぬ己ガが片ハくの羽ガい打きて術ハシマとて失タモリりと見也。  
うく宜ウツクしげふ。護法天童降アサヒて云ハシマと云ハシマるを變現ヘンジケンし  
くる靈山リョウセンは狀ササを止ヤムさぬあやふ云ハシマへぬ幻語カモクあり。然るは護  
法天童とて。佛法を護カモスる物の天上アモニに在リ。佛法の幻  
説カモク小こそ有れ實サマよ然る物モノは有る。非ざれハシマ。猪ササこけ  
事カモコトは本朝語園カモコト。も見えハシマある。共ハシマ本ハシマは今昔物語カモコト集ヤシマ記  
せるを採ハシマれハシマと思ハシマ。但ハシマ今傳ハシマる今昔物語カモコト小ハシマ比ハシマ  
山カモコト天狗カモコト報助カモコト僧恩語カモコトといふ題カモコトのみ有リて。文カモコト闕カモコト。必ハシマ此  
を採ハシマきるあほべし。是ハシマら正ハシマしく形カモコトを古屎鷦カモコト鷯カモコト受ハシマて幻通カモコト

ふ天狗あり。其ハシマも番ハシマ聞ハシマ。古夷カモコト。山カモコト人カモコト  
抑ハシマ釋魔カモコトの鷲カモコト。鷗カモコトの形カモコトを受ハシマる事カモコトは。上カモコト論ハシマ。如ハシマく。天狗と  
いふ物モノ也。元より狗カモコト。も狸カモコト。も似ハシマ。む。高鼻長喙カモコト。みて翼カモコトあ  
此ハシマても。種カモコトの鳥獸カモコトも化ハシマれハシマ。鷲カモコトの化ハシマ。魔カモコト。多カモコトく。山カモコト  
人カモコト說ハシマ。其ハシマ部ハシマ入ハシマる故ハシマ。此形カモコトを受ハシマる形カモコト也ハシマ。  
但ハシマして。皆ハシマ。一様カモコトの形カモコトとは聞ハシマ。人體カモコトのまゝ。小高鼻  
有リ。も。無カモコト。空カモコト。翼カモコト。有リ。も。無カモコト。交ハシマ。体カモコトと見ハシマ。より。諸  
國里人カモコト談ハシマ。いふ書カモコト。駿河遠江の境カモコトある大井川カモコト。天狗  
を見ハシマ。あやかり。闇カモコト。夜カモコトの深更カモコト。及ハシマびて。潛カモコト。封壠堤カモコトの陰カモコト  
小忍カモコトびて。伺ハシマ。よ。鳶カモコトの如ハシマある。翅カモコトの徑カモコト六尺カモコト。丈二尺カモコト。

大鳥の様ある物川面カバヅチがあまく飛來て上下アッパーアンダとて魚をとる様あり。人音ヒノイニも忽不ハシナ去る。是を俗ふいふ術あき。木葉天狗れどいふ類小やと見ゆ。遠江國人中村眞幸云ひるは正しく其形を見よる事は無れど、秋葉そば外高き山トヨタケに。夜ヨル天狗の火とて數多見ゆる事あり。其火の状雷りて在るゝと見れむ。遙ハシカ小飛去トビサリあと見み見え、又み樹間コノマより出没トメテ。至處事トコロアリ。又時ヨリとして彼物の噂ウラジなどしがほシガホ小云コトハとたは其火忽不目ハタハタ近く來りて煌キラキラく事有り。大うハクく件ケツの火は見ゆる。夏の事あるう電チヨリし雷ルイの音聞ゆれむ。有むる火ども次く小去失サリウセぬ。其らま雷ルイは聞えぬ方カタ所シテ遂シテ行くやうふて。終

小見えコトハああざぬ。是を常の事あれ。必其形を見ミる人有べしと云ハシナ。又疫病痘瘡神エイモガサノあと。都スヘて妖魅モモチ類タビの雷ルイを怖ヨリ事思シムい合ハシナ。然シカれども然シカる忌タリしき形タリを受ヒカルるは。大天狗オオカミ小天狗コトハれどいふ強猛ヨリあはれ釋魔モハある。高くも卑ヒクくも尋常コノツキの無智モチなる僧シヨウを。屎鷄ヒヨウとも恐ヨリ。凡タダの鶴ハクと成ハシナる。大慈ダシ小慈コトハ。其を法師ハシナは。總モトじて人の門ド立て。物乞モコふ倫ルンまでも自然カノアカラフ貢高邪慢アガハシ心ハラ淡ハラハラく。吾こそ最無上の尊き道タリを行ハシナ。聖セイよと思シム顔ガ小て。俗家カムイを凡夫ハシナと陋ハシナしむる心ハラハラ。ほぞくハシナく不有ハシナて。有智無智モチモチを云ハシナは。俗家の物カスを掠ハシナめ取ハシナらむと欲ハシナむ心ハラハラ常

○古今妖魅考二之卷  
○三十一  
よ見あるを。鷺アヒまゝ。鳩はも。竊を伺ひ。人の手小持する物を  
ゆすふ。抓アザミサ去らむと欲するが。其性の似ナリる故ナカニ。互タガは生滅  
變ハシメあるみや有らむ。但し此を試トトコ小云ナリけみを。因ナカニ云ふ。先年  
我許ツカか使ハシメへ正マサニし男の。遠江國人アキラカ云ハシメるは。吾郷の邊  
よ。天狗の漁獵と云ハシメて。池アシカニ堀れどアシカニの魚。大き小さアシカニ悉  
く死マサニてゐる事有ハシメ。然る小其魚目アシカニ一粒アシカニもあし。此を皆彼物  
の取食トリクラへアシカニありと云ハシメ。天狗を喰アシカニる業アシカニもアシカニ事アシカニ。俗  
諺アシカニ。悪アシカニかしあく。人の見ぬまアシカニ小物アシカニはアシカニを。眼アシカニをぬくと云ハシメ事  
あアシカニ。此天狗アシカニ所アシカニ爲アシカニより云ハシメ出アシカニる。然るは沙石集アシカニ。和州菩提山の本願僧正アシカニ丈房アシカニ。忠寬正信房

と云僧有アシカニり。餘アシカニゆ小眠アシカニりアシカニ。眠アシカニ正信房とアシカニ云ハシメ。とて。是  
が甚アシカニしく眠アシカニれる事アシカニともを記アシカニし。儲アシカニ其死アシカニり。後の事を記アシカニして。  
近アシカニづく興福寺の東門院アシカニ有アシカニり。兒隱所アシカニ。居アシカニありける。小春  
日アシカニ山の方アシカニ。鶴アシカニ一アシカニ來りて。此兒の前アシカニ。眠アシカニ居アシカニ。怖アシカニしさ  
小腰刀アシカニを拔アシカニてはアシカニと切アシカニて。やアシカニて絶入アシカニし。あアシカニり。体アシカニを。人見アシカニ  
りて。房アシカニへアシカニた入アシカニきて。祈アシカニり。刀アシカニ小血アシカニ付き鶴アシカニの毛散アシカニり。り。足アシカニ  
りて。口アシカニ走アシカニりて。忠寬アシカニが何アシカニとれく。眠居アシカニるを。過アシカニ。原事易アシカニうら  
いとアシカニを云アシカニる。とかく祈アシカニあしらへて。別事無アシカニり。先生アシカニ。小眠  
正アシカニしが。生アシカニを隔アシカニても眠アシカニりふ小こそ。習因習果アシカニといふ事アシカニ。生アシカニを經アシカニれども  
辨アシカニ知アシカニべし。常アシカニ心アシカニ不思アシカニそみ。身アシカニヲ馴アシカニぬ事アシカニ。生アシカニを經アシカニれども

相次て忘れず。捨難くもて。自然小爲られ思ふ也と有り。

習因習果の説實ふ然る言あり。心有らむ人をよく此理を思ひて。常は因を神の道よ習ひて。神の道は果を得む事哉思ふ也。

あく舊き諺コトハ。鷦を天狗の乗物といひ。山伏の果も鷦アシカも成とも云すれど。無智は尼法師山伏カホヨウ。大凡鷦と成りて。天狗は下使シタサマを爲て。人間小神は守護スギヤ。透間スキマを伺ひ。妖魔の入る手引テビキを成す物と見えうア。

鷦アシカは天狗の乗物と云。諺コトハ。源平盛衰記。治承元年四月廿八日の大火灾處サス。指巫サヌミと名を得る盲卜者アマツブ。火本ハ榎

口富小路と云。聞て占は推條口占とて。人口と云。方ば燃廣からむ。富小路と云へ。鷦は天狗の乗物あり。小路を歩む道あり。天狗を愛宕山アダガニ山住めば。天狗は所爲スナリにて。翼の通口よ。乾の愛宕を指て。筋違スナリさまか焼ヤクりぬと覺ゆと云へ。協由見えて。果して其言の如く焼ヤクより。今世モリコも尻尾シラフせ切ある鳶の飛ぶあと有る邊アタマを。ともに木を火災ヒザイあると云。鷦アシカ太郎坊タラバ使者シマツを云め。山伏の果を鷦アシカふあると云。あとは猿樂カニコの棟山伏といふ。狂言カントは言葉コトハふ見えうア。共小舊く然る諺コトハ有リ。小依正アマツシテて云へる取アマツ。また梅窓筆記。焼亡ヒヤウ。太郎次郎と云。之を清解眼抄。後清錄記。云治承二年。

戊戌四月廿四日夜半許。七條北東洞院東中許。洞院面焼込。  
世人號次郎燒亡也。太郎去年四月廿八日。至于大極殿燒亡。  
云々と有るも。由有げある事なし。まさに近き世よ記せる書  
あれど。新著聞集よ。京の釜座下立賣下町よ。丹後屋佐兵衛  
と云ふ絹屋有しが。機を二十四立りる。或時機の鳥居よ。鷦  
老あり。居眠りる。其翌朝よ。一機の糸何とあれ切り。誰  
がわざぞと穿議し。れども。更ふ證據も無く。此の如く毎  
日切る程よ。後ふは二十四機残らば。切をしうば。祈禱亦  
ど修まぬふ。尔や切せり。或人云く。今度の次第を思ふよ。  
橋慢の心あり。斯る災の所處不や。最初小鳩來也しも。只

事小非矣。愛宕信仰然る。ましと云是は實尤の事とて。正五  
十九月よ。愛宕山ノ百味を献り。月詣寺べきよし立願せしう  
は。災忽不<sup>モ</sup>止<sup>ム</sup>。小り正と云事<sup>モ</sup>。まく下總國香取郡万歳村  
ある門人。高橋正雄が語りらく。近き程我<sup>ガ</sup>村は後山へ材  
の者ども五人連立て。木こ正不行り候よ。少し傍<sup>カタ</sup>ある山の  
端<sup>ハ</sup>。常のより汚氣小見ゆる鷦一羽を休め居あり。其  
を見て中ある一人が。恐ろしげある山伏は立居<sup>マジ</sup>と云  
ふ。然るよ四人の者は目<sup>ハ</sup>は鷦とのみ見ゆれど。云ひ諍ふ  
よ。彼一人のみ。正しく山伏なる者をと云ひて。更不四人が  
言を聞入<sup>キ</sup>び。共小山<sup>ヨリ</sup>歸りて後<sup>ハ</sup>。彼男忽<sup>チ</sup>熱さし煩<sup>ク</sup>

ひて死ゐる。残り四人を何事も無正き。甚異した事ありと語。又、猶山伏を見え。鳶と見えたりと云ふこと。外ふも聞くる事あれど。煩々と悉くも記さず。

於此餘ふも。釋魔と成べき因縁の語等。經論多く見こる。彼此記さば。まだ楞嚴經。佛告阿難。攝心爲戒。因戒生定。因定發慧。是名三無漏學。姪心不除。則塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷姪。必落魔道。と有るは。姪心を斷ざる僧徒の魔道小墮る證文あア。此よ依正て熟く古の名僧大徳と聞えし釋子等の姪事。小心を蕩しする倫を。按する。まだ舊く釋玄昉は僧正として光明皇后を犯して。善珠僧正が生せ奉る。

光明皇后も藤原不比等の女みて。聖武天皇の后。乃く玄昉。其頃の智識。唐土を渡て。種いに經論法をも傳來ア。朝廷は更あり。世より重く用られあるを。皇后深く愛し給ひ。玄昉が子を生給へア。善珠僧正是あり。此よもて國史。僧正善珠を。光明子は孽子ありと記され。然れど天皇は知看さだ。一人も此事を云ひ露す者無めし中。藤原廣継といひし人有て。天皇小玄昉が奸を奏しける。却て廣継を逆鱗有て。筑紫牙流一給ひし。は廣継憤りて謀反。起しぬ。爰小追討使を遣して誅を給ふ。其後玄昉を筑紫の觀音寺み遣し給す。廣継の靈魂雷とれめて。玄昉

が首を拔捨<sup>スキダテ</sup>たり。委くも國史を見べし。斯て玄昉<sup>スミ</sup>が靈の魔道<sup>モード</sup>小入ある事を。太平記ある雲景<sup>クンジン</sup>が未來記を見て知べし。其も下小舉<sup>アゲ</sup>。

釋道鏡<sup>シキドウ</sup>如意輪法<sup>ニイリュウ</sup>を行<sup>フ</sup>る驗<sup>カタ</sup>小よア<sup>リ</sup>。高野姫<sup>タカノヒ</sup>天皇不寵<sup>ハシメ</sup>せらき奉<sup>ア</sup>。

古事談<sup>コトタビ</sup>此女帝<sup>モテ</sup>天平寶字六年<sup>タツノヒサシ</sup>。簪<sup>タケ</sup>を落<sup>ハガ</sup>し佛道<sup>ブダ</sup>小入<sup>ア</sup>。法諱<sup>ハルモニ</sup>を法基尼<sup>ハカルニ</sup>と稱<sup>シ</sup>奉<sup>ア</sup>。同七年<sup>タツノヒサシ</sup>九月<sup>クモツ</sup>。道鏡法師<sup>シキドウ</sup>を小僧都<sup>コウソウ</sup>とれし給<sup>フ</sup>。元<sup>モ</sup>河内<sup>カヘ</sup>國人<sup>クニヒト</sup>みて。俗姓<sup>クモリ</sup>を弓削氏<sup>タケハタシ</sup>あり。法相宗<sup>ハタケヤマ</sup>小て。西大寺義淵<sup>ヨシタマ</sup>僧正比門流<sup>ヒモンリュウ</sup>あ<sup>リ</sup>。常<sup>ハ</sup>小禁掖<sup>コウキンエツ</sup>侍<sup>ア</sup>。甚く寵愛<sup>ハシメ</sup>せらる。如意輪法<sup>ニイリュウ</sup>の驗德<sup>カタハシメ</sup>と云<sup>ア</sup>。天皇道鏡<sup>シキドウ</sup>が陰を。

れや不足<sup>アツ</sup>思食<sup>シムシ</sup>され。薯蕷<sup>ヤモリ</sup>をもて陰形<sup>カタ</sup>を作<sup>ア</sup>。用<sup>シ</sup>させ給<sup>フ</sup>。折籠<sup>アレコモ</sup>りて腫塞<sup>ハレサカ</sup>。大事<sup>ハシメ</sup>小及<sup>ハシメ</sup>ぶとだ。百濟國<sup>ハルシ</sup>の醫師<sup>ヒサギ</sup>小。小手尼<sup>コハチニ</sup>とて。其手嬰子<sup>ヨガナガ</sup>の手<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>れる。見奉りて。帝<sup>タケシマ</sup>疾癒<sup>ハシメ</sup>べし。モ<sup>モ</sup>。手<sup>ハ</sup>小油<sup>スモリ</sup>を塗<sup>アハシメ</sup>て。取<sup>ハシメ</sup>らむと欲<sup>リ</sup>ぬ。右中辨<sup>ハタハタ</sup>百川<sup>ハツカウ</sup>。靈狐<sup>リョウコ</sup>めゆと云<sup>ハ</sup>いて。劍<sup>ハサウエ</sup>を抜<sup>ク</sup>て尼<sup>ハタハタ</sup>の肩<sup>カタ</sup>を切<sup>アハシメ</sup>る。此<sup>ハ</sup>小仍<sup>ハタハタ</sup>て療<sup>ハシメ</sup>。事あく崩<sup>ハシメ</sup>じ給<sup>フ</sup>と有<sup>ア</sup>。爾<sup>ハ</sup>を道鏡<sup>シキドウ</sup>が惡逆<sup>ハシメ</sup>。國史<sup>コクシ</sup>を見て知<sup>ベ</sup>し。畏<sup>ハシメ</sup>くも天日嗣<sup>アマツロツチ</sup>をさへ<sup>アハシメ</sup>窺<sup>ハタハタ</sup>ひ奉<sup>アハシメ</sup>。墻囊抄<sup>カタハタシ</sup>。天皇密<sup>ヒツラヒツ</sup>。藤原押勝<sup>タケハタハシメ</sup>を幸<sup>ハシメ</sup>し給<sup>フ</sup>。まく道鏡<sup>シキドウ</sup>を召<sup>ハシメ</sup>て。寵遇<sup>ハシメ</sup>他<sup>ハ</sup>異<sup>アリ</sup>。此二人幸人として。威勢<sup>アマツ</sup>威諱<sup>アマツ</sup>故<sup>アリ</sup>。涅槃經<sup>ニハラ</sup>。所<sup>アリ</sup>有<sup>アリ</sup>三千界<sup>サムライ</sup>。男子諸煩惱<sup>ハシメ</sup>合集<sup>ハシメ</sup>為<sup>アリ</sup>一人<sup>ハシメ</sup>。女人之業障<sup>ハシメ</sup>。といふ文<sup>アリ</sup>を歴覽<sup>ハシメ</sup>有<sup>アリ</sup>。

朕女人ありと云すども。全く此儀あし。佛の妄語ありとて。  
經ワレ小便を爲うけ給へり。此經の護法神怒りるふや。忽々  
婬慾熾盛シテ成て御座のみあらば。女根廣博アラカニして。敢て其  
欲を停スルべく。天下小勅を下して。大根の者を求め給ふ。押  
勝其仁小當タキじりども。道鏡れりよく是小叶アリと有スル。餘  
ある事タキ思ハシメやれ。傳スル事ふや。女を殊シニ婬心深きもの  
ふもあき。佛説の如きを。御言コトの如く餘ある妄語あり。然る  
よかクる崇タツは有スル。釋魔ワタツ比態あり。護法神といふ物やが  
て其あり。其由を次シテ小云ふを見るほし。

釋玄賓は大僧都みて。當時上下よ大徳と稱せられ。法師の淨

行を云ふも。必例より出らゆ。人取るふ。大納言ノミノミ人の北  
方タタ域ケサツ縣想して。惱ナガみ煩アブい。吉原ヨシハラ人羊ヒツギ本ホン無ムカシ也  
今昔物語集。古事談撰集抄。長明發心集など。昔。玄賓僧都  
と云人有り。山階寺の止事ヤムコト。智者チザウれハ。世を厭ハシメふ心  
深くて。寺の交ハシメを好まば。三輪河の邊ハシメ。僅ハシメある草庵ハシメ。ま結ハシメひ  
住ハシメり。桓武帝の御時。此事を聞食して。強ハシメ不召出ハシメ。乞ハシメは。遁  
べき方ハシメ。懃ハシメ小參ハシメり。然れども猶本意ハシメらハシメ。思ハシメける不  
や。奈良帝の御世。大僧都不成。給ハシメり。よ辭ハシメ申ハシメにて。三輪  
川の清ハシメき流ハシメす。考ハシメた。衣の袖ハシメを又ハシメ汚ハシメさハシメ。と詠ハシメて奉  
正。弟子從者ハシメ。知ハシメ。何地ハシメとも取ハシメく失ハシメり。其後年

來經て越路北河の渡守となりて居たりしを。弟子ある僧の。此を通るとだ見付ゝをしらば。又立去りて後よ。伊賀國小。或郡司が家の馬飼ウマヅルをありて、年來經りる程ノリ。郡司罪有て處を逐シテはる事ナシとして歎きおるを慰めて京小伴トモチ。此時伊賀國也。昔知シムる大納言ある人の給ツブをして有シうば。其へ行きて。郡司の罪を許し給はシれども。淨行比例ヨウリとも引出ハサウれど。是より後の事ふや。發心集小記せる事アリ。其も此僧スケを忌ムしく貴き人として。高きも賤シムも。佛の如く思スル事アリる中ノ。大納言ヒロコトなる人。年來殊ビタキ小相憑シカツを給スルけ。るか。僧都そよはうとれく惱ヒヤコトみて。日頃よりぬ。大納言覺カタ

東あさの餘ゆ少。自渡り給ひて。何ある御心地かと細  
やう小訪給ふを。近く寄給へ。申侍らむと有れぞ。異くて指  
寄給するよ。忍ひて聞也。誠少を殊勿病少も侍ら。一日  
殿の御許へ詣ありし。北方の形いと目出度。と見給へ。正  
も成髪ホノカ少見奉りてのち。物覺え。心惑ひ。胸塞ハキナが足て。何  
少も物の云れ侍らぬあり。此事申ぶ。恐りて憚ハカリア有れど。深く  
憑奉りて久しく成ぬ。爭イシテは隔奉らむと思ひて。あむと聞  
也。大納言驚き。らば何うをとく宣ぎ。最安に事れ  
也。速よ御惱を止てむ。渡り給へ。何少も宣はむ。便よく  
計らひ侍らむとて帰正給ひ。上少かくと聞え給ふよ。更少

アあはれよ仰られむやを。最淺間しく心憂られど。かく懇  
小覺ホホし計ハラふ事あきば。あせり辭給はむ。其用意して。僧都ハシア  
按内せきせ給へるか。最う處イトもしく法服タマ正タマあくして來り  
給へり。異アラく實ゲニくあから文覺タマあれど間アリれど立て。らる様  
ある方カタ小入り給ふ。上の美ウラハしく取繕トリガフひて居給へるを。一時  
はう正タマ故ハシくハシ守ムツて。彈指ツマハサをそ度アリあり候。斯ハシて近く  
寄ハシこと無ナシて。中門ノミは廊ハラ小出スルて。物モノまれむかだばて帰タマりけ  
きは。主ハシいよく尊み給ふ事限タマリなし。不淨ハラハラを觀じて。其執ハシ  
ひる返タマちれるほし。此觀を人身の汚穢タマラハラしき事成タマリ思ひ解く  
佛の教あり。若人の為ハシふも愛著モシし。自ハシも心有ハシらむ時ハシも必ハシ此

相思ふはしと云へ。大方人の身は骨肉に操り朽る。  
家の如し。六府五藏に有狀。毒蛇に蟠る小異あらず。血も體  
をうぬらし筋を折き目眞扣す。僅に薄き皮一重覆へ  
る故也。此諸の不淨を隠せ。粉を施し薰物をうなせど誰  
うは偽れる飾と知。海小求を山不得。味も。夜經  
ぬきを悉く不淨を成りぬ。云はく繪うける瓶小糞穢を入  
れ膚する體に錦を纏へる。如し。譬大海を傾けて洗ふと  
も清淨べからず。若栴檀を焼て匂はすとも。久しく香しが  
らじ。况むや魂去足壽盡ぬる後も。空しく塚の邊小捨べし。  
身膚れ膚り乱きて。終小白き骸と成。眞は相を知る故也。

念ト小是ト厭ハシタ。愚カロカある者は假カタの色ト恥モチりて心ト惑モチ。あと壁タトへを廁カハヤ中の虫ハ糞穢カロカを愛モリ。如シ。空アリと有アリ。篤亂今按カセ。不淨觀カタの事カタ。かく言コナタ痛モチく云ハキども。此を言ハシタ。或ミテみよて。更カク驗カタ。徒事イミツラヂあり然モチはかく觀カタ。心トの解ヨクる物ト少シ有アリ。玄賓僧都カニシクノサント。う北カタマリ方カタマリ不アリ再見カタマリえにとも前カタマリ小見カタマリて戀心コヒゴトの起カタマリれる時カタマリ。病付ヤミツクはう。思カタマリひの凝カタマリ。時カタマリ。此觀カタマリを為カタマリて其心トを解カタマリべきか。いゝよ觀カタマリ。れども戀相見カタマリては倍カタマリ小戀カタマリ。心トを増カタマリり。然カタマリに。本意カタマリは遂カタマリがて小此觀カタマリを為カタマリて心解カタマリる狀カタマリ持成モテナセさめり。或ミテ禪僧

七態カタマリとて人の骸骨カツカツをかきて骨カツカツ隠カツカツ皮カツカツふは誰カタマリを迷カタマリらむ。皮破カツカツ生カツカツはかカツカツる姿カツカツ。といふ歌カキを書カキる有アリ。此トも不淨觀カタマリの心トあれ。死カツカツ。而後カツカツの骸骨カツカツは状カタマリも思カタマリて現カタマリ。美カタマリ兎ウサギを美カタマリしと思カタマリぬ理カタマリ。決免カタマリて無き事カタマリふと。其カタマリも美き食カタマリ物トも。食カタマリて後カタマリは糞カツカツとある事を觀カタマリ。とも美き味カタマリを失カタマリはざると同カタマリ理カタマリあり。此トも思カタマリへ俗カタマリの口詠カタマリ。小百骨カツカツと觀カタマリあぐらも美カタマリしやと云ハシタへ。處カタマリ中カタマリ小面白カツカツり。梵綱經古迹カタマリと云ハシタ。此身不淨累骨所成カタマリ。血肉便穢薄皮所持種カタマリ。臭穢九孔流漏不淨似淨謂皮上分白膏熱血交所重映誑心媚眼種カタマリ燒害然諸愚夫曾无厭背云々と見え。まゝ眞言の

密法。男女の觸體を合せ。壇トモおき。彈指ツマタギして觀タマフむ。法有  
と聞せれど。上小論する如く。殺生は。採る小足らば。さて  
此大納言は誰あり。む。何々。釈子シキが信ヒシテとも。其北方  
をそれふ逢ハバしめむと為り。是。物。狂ハルニふ事。あり。只不淨觀  
けみ為ハシメる故。事無れど。誠小かの不淨行を行ひ。さらむ  
小も。其を見ハシメ。有む。甚も。をこれる大納言。小を。在リ。亦  
ひて古今集アラタニシイチ。山田守ヤマタモリ。僧都の身アソ。哀ハシメ。秋果ハナ。ぬれを  
問ハシメ。人も。嫌キテ。といふ歌を。彼僧都也。といふ。此實ハシメ。あらば。後アラタニ  
も人アソ嫌キテ。故の述懐ハシメある。ばし。發心集ハシメシイチ。小雲風の如く  
遷ハシメ。行ハシメ。是。田れど。守る時。も。有り。ふや。と。有ハシメ。ど。然ハシメ。

心ハ非ハ。山田守ヤマタモリと云ハシメ。は。山田曾ハシメ。保登ハシメ。僧都を係ハシメる  
意ハシメ。然れど。い。う。小道德ハシメ。顔ハシメ。しよ。と。とも。釋子シキ。よ。心ハシメ。許ハシメ  
天アソ。まじた物ハシメ。あり。り。ア。テ。封ハシメ。昌ハシメ。御ハシメ。也ハシメ。  
金剛山ハシメ。不行ハシメ。住ハシメ。け。る。聖人ハシメ。御門ハシメ。の。御妃ハシメ。小愛著心ハシメ。を。發ハシメ。現  
小妖魔ハシメ。と成ハシメ。て。燒乱ハシメ。せ。り。其ハシメ。は。今昔物語集ハシメ。天狗燒亂語ハシメ。  
い。あ條ハシメ。は。文德天皇の女御ハシメ。物氣ハシメ。よ。煩ハシメ。ひ。給ハシメ。り。れ。を。露ハシメ。の。驗ハシメ。  
る。僧ハシメ。を。召。集。め。て。様ハシメ。に。御祈修法ハシメ。有ハシメ。ど。も。露ハシメ。の。驗ハシメ。  
聖此妃ハシメ。本書ハシメ。小。潔殿后ハシメ。と。有。れ。と。彼皇后ハシメ。ふ。を。御ハシメ。ま。ち。え。贈正  
一位良相公の御女ハシメ。よ。て。多賀幾子ハシメ。申。に。女御ハシメ。あり。其。由下ハシメ  
小注ハシメ。ふ。を。見。て。知。べ。し。此。を。ま。く。本。書。ふ。も。后。と。有。き。ど。女。御

と記し及。

而るみ大和國葛木山の頂小金剛山といふ山。一人の貴祀聖人住り。年あら此處よ行ひて鉢を飛して食を乞き。瓶を遣て水を汲む。かく行ひ居る程ふ。驗竝あし。然れど其聞え高く成ふり。鉢を飛し瓶を遣ふも幻術あり。其由別小記せる物ある。小鉢を飛し瓶を遣ふも幻術あり。其由別小記せる物ある。小金て此聖人の名は。何と云々む傳ぢらば。

天皇あの由を聞食して彼を召て祈しめむと思食して召す  
た由仰下されぬ。

元亨叙書を考ふ。南天安二年は事と通えり。此と國  
史小記され候。其は此書の下文ノ云如く。極めて便あく憚ハガ  
ある事も多ば承るべし。

使聖人の許ヲカニより行フて。此由ヨリを仰ハシムる。聖人度ハい辭ハシメし申せども。  
宣旨ツバシ背き難ハジキたる依リて。遂ハシメテ參アサムぬ。御前ミツノ召ハセて。加持ハシメし免給  
ふ。子チ其驗アラフ新ハシメテ少シして。女御メイヨウの一人ヒト比侍女ヒメイナ。忽ハナタナよ狂ハヤハヤひて哭ハラハラ嘲ハラハラ  
走ハリハリ叫ハヤハヤふ。聖人セイジン弥ハシメテ加持ハシメす。女縛ハシメテせらうきて打責ハシメテらしく聞ハシメテ懷ハシメテ  
中ハシメテあると一ヒトの老狦ハシメテ出ハシメテて。轉ハシメテひて倒ハシメテき臥ハシメテ矣。其時ハシメテ小聖人ハシメテをもて。狦ハシメテ  
を繫ハシメテがし免ハシメテて。此ハシメテを教ハシメテふ。

を人ふ託さる事。畜類とて有まじ犯事の理れどを言  
誨せむを云ふよや。

女御は病一兩日の間止給ひぬ。父良相公此よ喜び聖人了  
暫く候すべき由を仰せ給へむ。仰ふ隨ひて暫く候ふ間よ。夏  
の事ふて。女御も御單衣ばうとを著給ひて御ける。御几帳  
比帷を風の吹返しよる。迫より聖人鬚かみふ女御を見奉り。見  
習はぬ心弓端正美麗の姿を見て聖人忽ち心迷ひ肝碎きもつぶりて。  
深く女御よ愛欲せ心を發しぬ。然ども爲べき方あく。思ひ煩  
ひて有るふ胸不火字燒かづぐ如ふて片時を思過おもろぐも思えべ。  
遂小人間を量りて御帳の内うちに入て女御の臥給へる御腰ごうよ

抱付ぬ。女御驚き迷ひて汙水アヘニツ小成アヘニツて恐給へとも。御力アヘニツ小辭アヘニツ得  
かくし。然れど聖人力アヘニツ盡アヘニツして燒カズし奉る。女房アヘニツ此アヘニツを見  
て。騒アヘニツぎ喧アヘニツ涼アヘニツ時アヘニツ。侍醫當麻アヘニツ鴨繼アヘニツと云者アヘニツ宣旨アヘニツを奉りて。女  
御の御病アヘニツ療治せむアヘニツ為アヘニツ小宮の内うち候アヘニツり候アヘニツ。殿上の方アヘニツ  
俄アヘニツ騒アヘニツぎ喧アヘニツる音アヘニツしりきば。驚きて走入アヘニツり候アヘニツ。御帳アヘニツ内うちあり  
此聖人出アヘニツり。鴨繼聖人アヘニツ捕アヘニツ取アヘニツて。天皇アヘニツ此由アヘニツ奏アヘニツ。天皇大  
小怒給アヘニツひて。聖人アヘニツ拘アヘニツめて。獄アヘニツ禁アヘニツせらきぬ。

文德天皇御紀。齊衡三年二月辛巳。當麻真人鴨繼アヘニツ為アヘニツ典藥頭アヘニツ侍醫。筑前介アヘニツ故アヘニツと見アヘニツ。されど心得アヘニツかアヘニツ事アヘニツ。其由下  
望アヘニツふアヘニツ見る。まし。

聖人獄ヤマツチニ在リて。更ハ云事アリ無シて。天ミ仰ギきて泣カイく誓セキ云ク。我ガ忽ハ死ルて鬼タケと成ル。此女御の世ノ在リはさむ時ニ。本意の如く女御子ムネコ睡ス奉スらむと云フ。獄司の者此ノ聞クて。父大臣ハタケヤマよ此事を申ス。大臣聞驚ハラハラま給スひて。天皇ミコトが奏スし。聖人セイジンを免スして本ハ山ヤマに返スし給スひた。然ハれを聖人セイジン本ハ山ヤマに帰スて。此思ハシメい小コトハ堪スじて。女御ムネコ小コトハ馴シテ近チ付き奉スるべき事をコトハ強ス小コトハ願スひて。憑スむ所コトハの三寶サンボウ小コトハ祈ス請スきと云フども。現世ソノコトハ小コトハ其事コトハや難ハシメりめスむ。本ハ願スの如く。鬼タケよ成ルむと思フひ入スて。物モノを食スざりりれば。十餘日ハチヨクヒま經スて餓ウツ死スたり。其後忽ハシメ小鬼タケとありぬ。其形身カラを裸ヌカ小コトハして。頭カブトを禿カサガあス。長八尺許ハチヒツキ小コトハして。膚カバ黒カマクラきこと漆ウレを塗スれるが如ク。目メは錠カミを入ス

あるが如く。口廣く開スルて。劍の如く駄スル歯生スル。上下小牙ハナヒを食ス出し。赤き襟衣カミナリを搔スル。腰ハラ小槌アシタケを差スル。此餓鬼俄ハシメ女御ムネコの御ハシメ。御ハシメ帳カマツチの喬タカハシ小立スル。人ハ現スル此ノを見て。皆魂カミを失ス。心ハを迷スルして。倒スルれ迷スルて。遙ハシメぬ。女房メイドあリは此ノ放スル見て。或ハシメて絶スル。或ハシメて衣アヒルを被スルて臥スル。而ハシメる間ハシメ此ノ鬼タケ女御ムネコを懷スル。狂ハシメし奉スル。是ハシメは女御ムネコ吉ハシメく取疏スル。打ハシメ嗟スル。扇ハシメま差隠スル。御帳カマツチ内ハシメ小入スル給スひて。鬼タケと二人臥スル。せ給スル。女房メイドあリも喫嘲ハシメらせ給スル。女房メイドも嘆ハシメらせ給スル。女房メイドも皆逝去スル。女御ムネコ三寶サンボウの驗ハシメ大要ハシメかくの如ク。諸ハシメの人ハシメには。有ハシメのあリふ。鬼タケと見

あれど女御小毛美ト丸男小見えりむ故ふかく姪れど  
御行ひを有しと通えゝと。宿松去らぐ。

良久しく有て日暮る程小鬼御帳より出て去ふりきを。女  
御何小成らせ給いぬらむと思ひて女房もち急ぎ參れば。  
例々違ふこと無して然事や有ぢらむと思召と涼氣色も無  
てぞ居させ給ける。少し御眼見ぞ怖一氣ある氣付せ給ひ小  
る。此由を内小奏られむ天皇聞食して奇異く怖あたより  
も何不成せ給あむべらむと歎きせ給ふ事限れし其後此鬼  
毎日小同じ様參る。女御まさ心肝も失給はぢして現心  
をれく。此鬼を媚しき者小思食みゆゑり。然れど宮内の人皆

此喜見て哀小悲しく歎き思ふこと限なし而す間よ此鬼人  
小託りて云く我うれぢ矣彼鴨継が怨ま鞭撻しと鴨継此  
を聞いて心小恐怖する間。その後幾程を經きしてふはあよ死  
りぬ。まゝ其男三四人有しも皆狂病小て死り。思ふ事  
鴨継も清和天皇紀貞觀十五年三月八日の下り從四位下  
行主殿頭兼伊豫權守當麻真人鴨継卒とあり然る小此妖  
事ハ天安二年の事ふて貞觀十五年より十六年れ前乃事  
あれを極めて餘人ありりむ。然きは天皇竝父大臣此を見て極く恐怖れ給ひて諸の止  
事れき僧共をもて此鬼降伏せむ事を懇よ祈らせ給り

乎。様々の御祈共は有りる驗ふや。此鬼三月許を不參りきば。  
女御は御心も直りて。本の如く成給ひつけば。天皇聞食し  
喜むせ給ひて。今一度見奉らむとて。女御宮より幸有り。例  
よめ殊々。哀れ流御幸ありとて。百官より仕よりり。前八年  
此の文勢を見る。今度の御幸は。此女御のかくる燒乱小  
逢給ひ。以來は御幸ねうじと。思食し定給ふ物うら。然考  
が小哀ふ思食の方はありて。一期の見納免とも思食して。  
入御あらせ給へると知り。最哀ある御事ありかし。  
天皇既に宮から入らせ給ひ。女御も見奉らせ給ひて。泣く哀ある事ども申させ給ひば。女御も哀小思食より。形も本の如く

みて御まゝ而る程小例の鬼俄小角より踊り出て御帳の内に入り。天皇此を奇異と御覽。間よ女御例の有様。御帳の内急ぎ入り給ひぬ。暫計有りて鬼南面ふ躍出ぬ。大臣公卿より始めて百官これ現。小此鬼を見て恐れ迷ひて。奇異と思ふ程。女御まゝ取次きて出させ給ひて諸人の見る前。鬼と臥させ給ひて。艶を見苦き事をぞ。憚る處もれく。為させ給ひて。鬼起ふり。是は女御も起て入らせ給ひぬ。天皇為べき方れく。思食し歎たて返らせ給ひ。

我ケ天皇命はしも挂巻毛畏き。天照大御神の美麻命より御まとして其大宮を。天御神と共殿。小御座にべき宮なし。有り

む。假カイふを穢キタマき法師ハシマあとをば。近付カガツテ給カジ小まじカミジだ事カトある。或用明天皇の御世カミコトノヨリ。御世カミコトノヨリ小聖德太子セイドクタツコトを蘇我馬子スガマコトが心ハラハラとあて。豊國の良名ヨウメイもれき法師ハシマを禁裡ミヤヌチ小入カミナリ給カジへるより。事始ハジメありて。後アフタくも然カナる古カミれ道ミサシ思スル召スルさシテ天神地祇テンジンジギの御政事モダツゴトをば。龐略カロツカ小成カニシキ給カジ。何事ナシ小付カガツても。法師ハシマを召スルて物せさせ給カジふ事カトと成カニシキ。奇カミしうは。皇神等スメガミタチの御守りミタマツキ薄ソシく成カニシキし故カクシふ。ももほきむ。法師の大妖事カミヨウジよ逢給カミヨウジふこと多く。斯カクシいみじき妖魔カミヨウモの燒乱カミヨウランをさす。嘸カミ小受給カミヨウジふ事カトも有カナし。悲カナヘとも悲カナヘしたわカナヘば非カナヘざらめや。然カナきは止事ヤムコト無カナらむ女人カミコトは。此事カトを聞カミテて。專モハラ小法師ハシマをば。近付カガツテべうらえ。此事極カミハタキ免カミハタキて。便カミハタキあく憚カミハタキ有カナる事カトあれども。末世カミコトノヨリの人カミコトへ小

見カミ小カミて。法師ハシマ不近付カガツタマむ事カトを強カミハタキ小誠カミハタキめむカミハタキ為カミハタキ小。かく語り傳カミハタキふと有カナ止カミハタキ。未世カミコトノヨリは人カミコトへ小見カミハタキし免カミハタキて。法師ハシマよ近付カガツテむ事カトを誠カミハタキ免カミハタキむ。かく憚カミハタキ有カナる事をカトし。祕カキさばカキ書カキ殘カキされカキ。撰者カキの心ハラハラ。最カミハタキも賴カミハタキ毛カミハタキ。上カミある玄賓僧カミボンサウジ都カミハタキがあと。下カミよ記カミテせカミる志賀寺カミガサの土人カミトジン。清水寺カミシミの先別當カミハタキが事カトあと。思カミハタキひ合カミハタキけべし。是カミハタキより後アフタれ事カト。宇治拾遺物語カミヒツヨウモノガタリ。女御物氣カミヒツヨウモノ惱カミハタキみ給カジりるを。本書カミブシ小。此カミハタキは染殿カミシミ后アフタと有カナき。誤カミハタキあり。そは下カミよ。元亨カミヒツヨウ釈書カミハタキ或カミハタキ人カミコト申カミハタキけるを。慈覺大師カミツカツダシの弟子カミコト小。無動寺カミムダツジの相應和尚カミコトコウヤウと申カミハタキこ。引カミハタキて注カミハタキを見て知カミハタキる。乞カミハタキ。

そいみじた行者みて侍れと申られを。召不遣も。即御使シテ  
連れて参リ。中門ノ立マサニ。人ノ見きは。丈高タカき僧の。鬼ノ如  
くある。信濃布ヒムカを衣フ。著キ。帽ハットの平足駄ヒラアシダをはよ。大木穗子オクモの  
念珠モチを持マサニ。其躬御前クボトコトシマフ召上べき者スルモノ非アリ無下ナシ。下種法  
師シテ小こそとて。只簾子スルコの邊ハタケ立マサニ。ガ持申メシテ一ヒと各オノ申  
して。御階ミヤヒの高欄タガ本ハシマ。立マサニ。立マサニ候マサニへと仰アゲ下シけシテ。御  
階ミヤヒの東ヒガ脇ワカツ乃ハシマ高欄タガ。立マサニから押懸タカシマ正マサニて祈奉タガシマ。女御メイは寢殿  
母屋マダラ小伏マサニ給タガシマ。いと苦氣クンジある御聲タガシマ。時ハシマ御簾タガシマの外ハタケ聞マサニ。和  
尚纏ワタマツ。その御聲タガシマをかゝタガシマて。高聲タガシマ小加持タガシマ奉タガシマ。人ノ身ノ毛  
よだちマサニて思タガシマ。暫タガシマし有タガシマれむ。女御メイ紅レバの御衣タガシマ二計ツカニ押包タガシマまれて。

鞠クルミの如く簾中タガシマノミあり轉タガシマび出タガシマさせ給タガシマひて。和尚シテの前ハシマは簾子タガシマよ投  
おき奉タガシマる人ノ騒タガシマてハシマいと見苦ミクダシし。内ヒガ入マサニ奉タガシマりて。和尚シテも御  
前ハシマ候マサニへと云タガシマすハシマども。和尚シテかくる乞食タガシマの身ノて候マサニへむ。爭タガシマり  
罷タガシマり上ヒガ庵アツミき坐マサニて。更タガシマ小上ヒガらば始タガシマ免上マサニられざタガシマしを。安タガシマから  
安タガシマ憤思タガシマひて。只簾子タガシマよて。女御メイを四五尺タガシマあぐタガシマ打奉タガシマる人ノふ  
わびて。御几帳タガシマとも找差タガシマ出して立隠タガシマし。中門ノをさして人ノ拂タガシマ  
开タガシマ。極タガシマめて顕露アラハ。四五度タガシマはう足タガシマ打奉りて。投入タガシマ。入マサニ。祈  
りき。本ハシマ如く内ヒガ投入タガシマれ。

元亨釈書タガシマ。下ハシマ引タガシマく如く。神の投出タガシマする由タガシマ云タガシマへゆ。但タガシマ  
此は佛法の異術タガシマ。餘慶僧正と云タガシマし人も。此法タガシマを行タガシマへ。

其を古事談。文範民部卿の餘慶僧正。貴記驗者として。  
人比妻を犯さぬくと云れり。僧正此由を聞て忽小  
民部卿の許より渡られたり。主其心を得て所勞の由云て  
會さむにきは僧正大事ある事。自聞えむと有り。れど出さ  
ざりる時。然らを投出せと加持せられり。きは屏風の上  
あり投出して。惑ひもく免だり。時。僧正さあそよて帰ら  
きけ。民部卿も三日許死するやうかて。惱み臥すゆり。是  
是小因て。子とも二人を僧正小奉りて。免されて命生小け  
アと有り。大うく世不驗者と稱ゆ。僧らはかゝる幻術を  
用ひて。異驗を見ゆるなり。此事も十訓抄小も記せる。

を校合。世で舉ひ。校者等云く。此民部卿の言。餘慶僧  
正。ま驗者と云ひて。人比妻を犯さぬく。钦。と云。れり。を思  
其弟は其頃は僧徒の。驗徳。と聞。幽勝者を。其小事託せて。  
姪事を行ふが多かる故。然云。れる事。を思はる。抑。これ  
僧正。小さる事。有。や無し。や知ら。然ど。此前後。舉られ。る。  
名僧大徳と聞えし。法師等。比事を思ふ。不も。世小語り傳へ  
ざる濫行の。殊。多有り。ること。推量。され。但し。彼善珠  
僧正。如き。正しく。孽子と。知れ。うむ。然ても。有。あむ。若  
も。其事の知れ。うち。ふは。人の血統。も。乱る。い。重  
き。枉事ある。を。世。人。僧と。云へ。老少。を。云。を。女の

馴近<sup>ナカ</sup>おぐを。忌はしとも思をらるは。深く彼道か誰惑せら  
れあるが故あり。返<sup>カム</sup>く異しき驗徳おりかし。僧比民部  
卿。この事小心著れ。亦然る事あれど。元より學力薄く。  
其魂は居て固からざる故よ。妖僧の幻術よ。屏風の上よと  
投出さき。三日<sup>カ</sup>程辛<sup>カ</sup>目見<sup>カ</sup>。剩<sup>アリ</sup>さへ己<sup>ガ</sup>罪<sup>ツミ</sup>とや思を  
れりむ。子等二人を法師小成て。其由を謝され<sup>カ</sup>る事と聞  
わるは。いとも怯く。片腹痛<sup>カタハラ</sup>き事ふこそ。  
其後和尚罷<sup>カ</sup>出るを。あはし候へと止むれども。久しく立て  
腰痛<sup>コレ</sup>く候とて。耳ふも聞入<sup>カ</sup>きに出ぬ。女御を投入<sup>カスイ</sup>られて後物  
氣<sup>ケ</sup>さゑて。御心地さはやう<sup>カ</sup>成給ひぬ。驗徳新<sup>アリ</sup>ありとて。僧都

小任<sup>カ</sup>事<sup>カ</sup>落<sup>カ</sup>き由<sup>カ</sup>成<sup>カ</sup>。宣下せら<sup>カ</sup>れども。箇様のかくゐ。何條僧綱  
ヲ成<sup>カ</sup>べ<sup>カ</sup>生<sup>カ</sup>。返<sup>カム</sup>奉<sup>カム</sup>と有<sup>カ</sup>。 漢殿后の眞濟僧正<sup>カ</sup>は靈<sup>カ</sup>。惱<sup>カ</sup>され給<sup>カ</sup>ひし事<sup>カ</sup>。下<sup>カ</sup>手<sup>カ</sup>舉<sup>カ</sup>る如  
く。諸書小見<sup>カ</sup>されど。金剛山<sup>カ</sup>は聖人の靈<sup>カ</sup>。燒乱<sup>カ</sup>せら<sup>カ</sup>き給<sup>カ</sup>ひ  
し事<sup>カ</sup>は。今昔物語より外<sup>カ</sup>み所見<sup>カ</sup>あり。爰<sup>カ</sup>ノ元亨<sup>カ</sup>釈書<sup>カ</sup>ある。相  
應和尚傳<sup>カ</sup>考<sup>カ</sup>ふ。天安二年藤妃名<sup>カ</sup>多賀<sup>カ</sup>幾<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>。良相<sup>カ</sup>女<sup>カ</sup>。嬰<sup>カ</sup>  
狂病<sup>カ</sup>。方<sup>カ</sup>不<sup>カ</sup>愈<sup>カ</sup>。藤公延<sup>カ</sup>應<sup>カ</sup>。應<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>宮<sup>カ</sup>。妃隔<sup>カ</sup>屏<sup>カ</sup>而<sup>カ</sup>臥<sup>カ</sup>。應持<sup>カ</sup>呪<sup>カ</sup>。不久<sup>カ</sup>  
擲<sup>カ</sup>妃<sup>カ</sup>於<sup>カ</sup>屏<sup>カ</sup>外<sup>カ</sup>。飛<sup>カ</sup>而<sup>カ</sup>至<sup>カ</sup>。應前<sup>カ</sup>舉<sup>カ</sup>聲<sup>カ</sup>。叫呼<sup>カ</sup>。應<sup>カ</sup>白<sup>カ</sup>可<sup>カ</sup>還<sup>カ</sup>。本<sup>カ</sup>所<sup>カ</sup>妃<sup>カ</sup>騰<sup>カ</sup>飛<sup>カ</sup>入<sup>カ</sup>  
帳中<sup>カ</sup>。頃<sup>カ</sup>刻<sup>カ</sup>靈託<sup>カ</sup>。妃<sup>カ</sup>陳<sup>カ</sup>謝<sup>カ</sup>。狂病速<sup>カ</sup>息<sup>カ</sup>。貞觀三年藤妃又病<sup>カ</sup>。藤公又  
召<sup>カ</sup>應<sup>カ</sup>。應<sup>カ</sup>加<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>。便<sup>カ</sup>愈<sup>カ</sup>。藤公大悅<sup>カ</sup>。與<sup>カ</sup>巴子國寶劍<sup>カ</sup>。是從<sup>カ</sup>唐國<sup>カ</sup>所送<sup>カ</sup>。特

爲奇寶者也と有ア。是正ノ宇治拾遺の事實小同じ。さて染殿、皇后の事は此後の事と見て別ニ記せア。然れど今昔物語、宇治拾遺小染殿、后と有源也。良相公は御女多賀幾子の事を。事實は似テ故小誤れる也。相應在慈覺大師比弟子を。名るが良相公より代りて剃髪せ族僧小て其蘿染の時よ。師告て藤公索度者是汝良縁之相應也。今名汝以相應蓋取藤公一字也。且て負うる由あれど。旁々由る事あり。天安二年。此年の八月。文徳天皇崩御ありしが。其前後小染殿皇后の懲み坐る狀。國史よも見えバ。多賀幾子を女御ニ御け。此ば元より其事の見えざる。然るべき事ア。

釋貞濟を僧正あ院。小染殿、后ノ想を懸て妖魅とありて懲まし奉已。其も古事談。貞觀七年のある。染殿、大后天狗の爲小懲され。稍數月を経る。諸有驗比僧侶。あへて能く此を降れ者有し。

染殿、皇后を文徳天皇の御后。清和天皇は御母ニ坐まし御名を明子を申。大政大臣良房公の御女あり。染殿を處名ふて。正親町の南京極北西ニ在。便良房公の家れど拾芥抄より見え。さて此事元亨訛書を始め諸書。寛平五年の事とせア。孰う是ある事を知ら。

天狗放言して云く。三世の諸佛は出現小非。ちは誰。我を降

さむと爰小相應和尚召小應して參入し。兩三日祇候まれど  
も其驗有ごせれし。本山不還かへ。無動寺の不動明王小對し奉  
ア。事由を啓白して愁懷祈請そは。そは時明王背きて西不向ふ。  
和尚隨つづいて西よ坐すわ。明王まゝ背そむて東不向ふ。和尚まゝ東  
小坐すわ。明王忽きみ小背そむて南小向ふ。和尚おほく南よ坐すわして涙なみだを  
流ながし合掌稽首けいしゅうして云く。相應明王おほく戴たまき奉うけ。更また他念ほかのねんあし。  
而もるふ今何なにの過ゆきを犯おとせ。眞事有ごとて。かく相背あいへ記給ききゅうふそと。明王  
の本誓ほんせいを念おもじて眼まなこを合あわしる間ま。

不動明王おほく本誓ほんせいとと。其一いっし。見み我わ身みこと者もの發は菩提心ぼだいしん。聞き我わ名な者もの。

斷たん惑が修しゆ善ぜん聽き我わ說いわ者もの得いた大智慧だいざい知し我わ心こころ者もの即そく身成佛しんじやく。其二いっし。一ひと

持祕密ひみ呪のろ。生なまく而ながら加護かご。奉仕修行ほうしほぎ者もの。猶如薄伽梵ぼくがほんと有ある。此事  
谷響集おだかひ小こも見えうる。夢ゆめ小こも非ひ覺さる。小こも非ひ。明王示しして云く。我わ生なまく加護かごの本  
誓せいよあらて。去さく死事しじ。今顯あらわし其その本緣ほん縁を說いわ。昔むか紀僧  
正真濟存生じゆのとき。我わが明呪めいのろを持も。今汝汝如おし。而ながら小邪  
執つか也。有あ天狗道てんぐぢ。本修ほんしゆの功力こうりょく小こよとて。皇后こうごう逼惱ひのうま  
に。我わまた本誓ほんせい爲ため。彼かれ天狗てんぐを護ま。故ゆゑ汝汝小こ背そむく。我わが呪のろを  
持も。彼此ひそ同朋どうへいある。故ゆゑ。彼かれ天狗てんぐを縛つかし難がた。然しかれども汝  
堅誠けんじやうある。故ゆゑ。我わ已すでにととを得え。汝汝祕方ひほうを示あらわさむ。汝宮掖みやび  
至まらは密ひそか小こ彼かれ靈れいを語い。你あなたを真濟じゆの靈れい小こ非ひ矣や。と。彼此ひそを聞き

うは必頭を低て恥満ら矣。爾時小大威徳の明呪をもて加持せむ。かねらぞ降伏を得む。我まゝ彼邪心を聞して正道小入らあ免む也。

宇治拾遺物語。巖山無動寺の相應和尚。比良山の西。葛川の三瀧といふ處。通じて行ひたり。其瀧みて不動尊小云りらく。我負て都卒内院。弥勒井の許。將行給房と。強ふ申られど。極めて難き事あれども。強引申あと泊れば將行べし。其尻を洗へと云。りきば。瀧は尻にて水のみ。尻よく洗ひて。明王の頭小けりて。都卒天小昇りたり。爰より内院の額。妙法蓮華と書きより。明王云く。是へ參入の者

は此經を誦して入る。誦せざれを入ら。と云房を遙か見奉上りて相應云く。我あの經を読み。讀めても誦ちること未叶。と云房は。明王。口惜き事あり。其義れらば參入叶。歸ら。帰ゆて法華經を誦して。ち參候べし。と。搔負て葛川へ帰り。きは相應泣悲むこと限あし。さて本尊の前みて經を誦してのち。本意を遂り。やれむ。其不動尊今よ無動寺小ち。等身の像ありと有。釈書ふも此像也。貞觀五年の比。相應が等身の長。小自列せ。故由いへり。深殿。后は御祈せし時。彼方此方。向。像。やがて其。ある。ほし。太。ト。釋魔の憑託。らめりむ故。然る異體は有し。爾

不動と云。その陀羅尼祕密法小毘盧遮那佛之化身と云ひ。大威德明王と云は。阿弥陀佛の化現ある由。真言の書とも不見えゝるが。此二佛共小元より有名無實あれど。其像は憑物あくては斯る異驗の有はくも非だまく。若くは相應が心とかく。拵事の有しと。妄話せるも知びうらゞ法師の然る妄說ハ珍有ゆむれど。相應和尚あは告を得て。感涙小堪也。頭面接足禮拜恭敬して。後日小召すよて復參り。明王の教誠は旨小任せそ。加持し奉る間よ。天狗を結縛せど。今より已後まく來ばうらすと。歸伏のうち。此よ解脱しなれど。后は尋常小復し給。正と有り。

眞濟があと清和天皇紀。貞觀二年二月二十五日の下。小僧正傳燈大法師位眞濟卒。俗姓紀。朝臣左京人也。父巡察彈正。正六位御園。眞濟少年出家學大乘道。兼通外傳。夙有識悟。從空海僧都受眞言敎。師監其器量。特加提誘。遂授兩部大法。爲傳法阿闍梨。時年二十五。時人奇之。眞濟入愛當護山高尾峯。不出十二年云。天安二年八月。文德天皇寢病。眞濟侍看病。大漸。夕時論歟。眞濟失志。隱居遷化。時六十一と見え。叔書小眞濟。鄉ノ。惟喬親王と惟仁親王と。位定めぬ。惟仁親王の驗者と成て。驗を抗りよ勝ちて。惟仁親王儲君と成給へ。清和

天皇是あり。あさう眞濟大志を失ひ。また文德天皇の看病小驗れきふ依て。倍く志を失ひて。隠居せらる由を記しまと贊曰。眞濟色小惑ひて魅と成あとは彼不平の時小當アテ。倫小皇后の美色を眼て。所守を失ひあるうと云す。然る小本朝高僧傳よ。極めあ眞濟が魔と成協と云も。世は浮説ある由を辨へ。これど此後延喜十一年の頃。玄昭と云々。院僧の亭子院にて修法のとだ。眞濟が靈鵲と成て來れるを玄昭捕へて爐不投じて焼り除ふ。まゝ怨を結びて。異あき小僧よ化して。空より降来る。玄昭法師此を見て心身惱乱し。協を淨藏法師が加持して。彼靈を降伏せらる。あと。

淨藏が傳ふ見え源平盛衰記ある。住吉を名乗れる物の言ふも。柿本紀僧正大法慢を起して。大天狗と成き。是を愛宕山の太郎坊と申すと云ひ。雲景が未來記にも。愛宕山を集ひて。世を乱さむを計り。天狗は中少。太郎坊とて眞濟も。而て。是字も。神社考ふ。柿本紀僧正入高尾峯起大慢心。為。太郎坊とは記さきし成べし。然るを澄圓僧が神社考志評論。此を辨じて。既明王曰。回彼邪心令入正道。若爾眞濟墮鬼趣得道者也。と云すれども。玄昭法師が修法の處。至まるは。是より遙後あるを如何せむ。不動明王。彼邪心を回して。正道ふへしめむと云ふとも。其を賴り。然るは

其謂ある正道やうて釋魔の正道ある故。猶妖魅を脱き  
ば。其も此後ふも依然として天狗社列ふ有を以て知べし。

釋淨藏を世。大徳貴所を稱れ。近江介。近江介中興が娘小奸  
きて。眞弟子を生み。

今昔物語集。大和物語あどみ。近江介平中興と云。人有け。正。  
家豊ふして。子共數有り。中ふ。一人の娘有り。年いまゞ  
若きて。形美麗。髪長く。有様微妙。うどけれど。父母此を悲  
び愛して。目を放。於事もあくて養ひ。程。兵部卿宮れを  
申。止事れ。御子。まよ上達部。あと。數夜這り。れども。娘  
高ぶきて。從う。父母を天皇小奉らむを思ひて。聾取も爲

て傳り。ゆふ。此娘物氣。煩ひて。日來。小成。け。れ。父母此  
を歎き。旁。付て。祈禱共を為せ。り。き。せ。も。其驗を無。れ。れ  
は。思ひ。繚ける。小。其。頃。淨藏大徳といふ止事れき。有驗の僧  
有。已。實。よ。驗。徳。新。れる。こと。佛の如く。也。れ。れ。を。世。舉。て。此。す  
貴ふこと限。あ。し。近江介。此。淨藏。を。以。て。娘の病。を。加。持。せ。さ  
せ。む。も。思。ひ。て。構。引。て。呼。り。れ。む。淨藏。行。い。り。ア。介。喜。ひ。て。加  
持。せ。さ。せ。り。ゆ。す。即。物。氣。顯。生。て。病。止。小。け。き。と。暫。く。は。此。て  
御。あ。し。て。祈。ら。せ。給。へ。と。父。母。強。く。云。り。れ。む。淨藏。言。あ。よ。隨  
ひ。て。暫。く。有。り。る。程。ア。隣。よ。此。娘。を。淨藏。見。て。ゆ。す。忽。小。愛  
欲。の。心。發。ア。て。更。小。佗。事。不。思。り。り。ア。ま。く。娘。も。其。氣。色。を。心

得よりりる。然て日來<sup>ヒ</sup>經る程ふ。何ある隙<sup>ヒ</sup>有けむ。遂<sup>ア</sup>會<sup>ア</sup>けど。其後此事<sup>カク</sup>隠<sup>キ</sup>と為れど。自然人粗知<sup>カク</sup>ふりを。世<sup>ヒ</sup>も聞え<sup>スル</sup>。然れど世人此事を云繚<sup>ヒ</sup>けるを。淨藏聞て。恥<sup>ヒ</sup>て其家ふも行<sup>ハ</sup>じ成<sup>フ</sup>りる。我かく<sup>レ</sup>余名<sup>ミ</sup>を取<sup>リ</sup>。今は世<sup>ヒ</sup>ふも有ら<sup>ジ</sup>と云て。跡<sup>ヒ</sup>を暗<sup>ク</sup>まして失<sup>フ</sup>り。悔<sup>ハヤシヤリ</sup>有ける。小<sup>シ</sup>や。其後鞍馬山を云處<sup>ヒ</sup>。深く籠居<sup>コモリキ</sup>て絶<sup>タニ</sup>妄<sup>ハシマ</sup>行<sup>カ</sup>ける。小前生の機縁<sup>ヒ</sup>や深り<sup>アリ</sup>む。常<sup>ニ</sup>彼娘の有<sup>リ</sup>状<sup>サ</sup>思<sup>ハ</sup>出<sup>ハ</sup>られて。心<sup>ナ</sup>懸<sup>カ</sup>。恋<sup>ヒ</sup>しく思<sup>ハ</sup>せむ。行<sup>ハ</sup>け空<sup>ソラ</sup>もあくて耳<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>旅程<sup>ヒ</sup>。打臥<sup>ムツリ</sup>ゆり<sup>カ</sup>。起<sup>ハ</sup>上<sup>ル</sup>て見<sup>ミ</sup>は<sup>ス</sup>傍<sup>タタ</sup>小文<sup>フミ</sup>有<sup>リ</sup>。弟子の法師<sup>ハ</sup>一<sup>シテ</sup>。罰<sup>ハシマ</sup>有<sup>ケ</sup>る。此<sup>ハ</sup>何<sup>ノ</sup>文<sup>ヲ</sup>と問<sup>ハ</sup>れる。知<sup>ラ</sup>ぬ由<sup>ヲ</sup>を答<sup>エ</sup>。

けきは淨藏文<sup>ヲ</sup>取<sup>リ</sup>て披<sup>ハ</sup>き見る。我<sup>ハ</sup>思<sup>フ</sup>ふ人の手<sup>ヲ</sup>て有<sup>リ</sup>。奇異<sup>ヒ</sup>と思<sup>ハ</sup>て讀<sup>メ</sup>む。かく書<sup>ヒ</sup>。墨染<sup>シ</sup>鞍馬山<sup>小</sup>い<sup>シ</sup>。旅人<sup>を</sup>あざる<sup>く</sup>返<sup>ハ</sup>來<sup>ア</sup>む<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>。淨藏此<sup>を</sup>見<sup>ム</sup>。小糸怪<sup>アヤシ</sup>く。此<sup>を</sup>誰<sup>モ</sup>遣<sup>ハセ</sup>。有<sup>ル</sup>ねら年<sup>モテク</sup>持<sup>カ</sup>來<sup>ハシマ</sup>。便<sup>タリ</sup>もねがえ<sup>バ</sup>。奇異事<sup>ヲ</sup>れと思<sup>ハ</sup>て今<sup>を</sup>此事<sup>止</sup>めて偏<sup>ハシマ</sup>。小行<sup>ハシマ</sup>をせむと思<sup>フ</sup>。ども<sup>ハ</sup>不愛欲<sup>の</sup>思<sup>ハ</sup>ふ勝<sup>タタ</sup>。其夜忍<sup>ハシマ</sup>て京<sup>ヲ</sup>出<sup>リ</sup>。彼女の家<sup>を行</sup>て構<sup>ハシマ</sup>へて然<sup>レ</sup>と云<sup>ハ</sup>。入<sup>ル</sup>と<sup>ハシマ</sup>れ。娘<sup>ヲ</sup>竊<sup>ハシマ</sup>け<sup>ハシマ</sup>。其<sup>ノ</sup>れを憇<sup>ハシマ</sup>くて女<sup>ヲ</sup>許<sup>ハシマ</sup>。此<sup>を</sup>あむ忍<sup>ハシマ</sup>て云<sup>ハシマ</sup>遣<sup>ハシマ</sup>。辛<sup>ク</sup>あて思<sup>ハシマ</sup>忘<sup>ハシマ</sup>。戀<sup>ハシマ</sup>しらをうみて啼<sup>ハシマ</sup>る鶯<sup>の</sup>聲<sup>ヲ</sup>。其<sup>ノ</sup>返事<sup>ヲ</sup>

ふ女めのも君忘生おきてかし鶯トリ。啼なきとめみや思出おもべき  
とれむ有りれも。ゆく淨藏大とく。我わよもうらき人ひとをは  
置おきあがら。何の罪つみあ死世死の世をば恨うらむ。とも云い遣やりと。此様  
云い通つうすと。度たどり不成なりれを。此事皆世よのふ聞きえつけり。  
然生なまは此娘むすめをば近江おうみ介限かいげんあく傳つたて。女御めごよ奉まつらむと思  
けれども。此く聞きえふれむ。親おやも知しらばして。遂つい不見みゆ成な  
ふたり。此を女の心こころは極きわ免めんて。懲うながさなせ。淨藏心じやうざうは盡つくして云  
とも。女用めのうぎらむくらむは叶かならぬ。然生なまは心こころうら女の身みを。  
徒むか成なれる也よそ。世人じにん云い繚はうりると見え。はく發心集はくはつじゆ  
徳とく淨藏じやうざう。日本第三さんの行人こうじあれやも。近江守おうみのかみ永世えいせいが女め子こを契けい

縛くわ結むすべ。久米くめ仙人せんじんを通つう不得めでて。空そらを飛とりきりれど。下衆げしゆ  
女めのは物洗ものあらいひくる。脛ひざの白しろかとける。小欲こよく煥發かんぱつして。仙せんを退しりぞし  
て只人ただひととあるふけ。今世いまよのふも。手足てあしは皮はを剥はなき。指指放燈はなし  
丸まるを碎くだき。様ようく片かた輪わを放はなす。佛道ぶつだうを行はふ人ひと。其その發心はくじんは  
程ほも隠かく無なれど。妻子さいしを設たてく。例たと多おほか。とも有あ。淨藏じやうざう。  
三善さんぜん清行せいぎやう第八はちの子こみて。元亨げんこう釈書しゃしょふ。母夢天人めうてんじん入い臥内おひさま而と娘むすめ  
生う。聰明無な雙ふた。七歲しちさい求め出家しゆと有あて。いと弱わよ。不測ふそくよ法驗ほうげん有あて。  
延喜えんぎの御世ごせ北頃きたごろ。活佛がくぶつの如ごとく稱めいれよ。不測ふそくよ法驗ほうげん有あて。此このの如ごとく。今  
昔物語きやくものがたりふ。此この女の心こころは極きわ免めんて。懲うながさなせ。淨藏じやうざう由ゆ云いすきことど。女めのれ心こころを  
誘いざなひて後あとすあそ。男おとこよは深ふかりれ。何なんか思おもへくも。大方おほは言い。

出ぐてよ思ひ惑ふを。男こそ。然しも深くは思をぬ物うら。  
假令は如くも誘ひ試るを常ある。然れど淨藏こそ懲りれ。  
さゑを常ふ讀む法華經みも。女盡勿親近といひ。まゝ為法  
猶不親厚。況復餘事とも有をや。凡て此物語ふ限らば。當時  
の習いとて。何の書ふも。僧の行狀をば。惡犯事放も。惡うら  
ぬ様小論の事いと多か。心きて見へきあり。然を有れど。  
此も元より人子なる。魔縁ふ引れて。幼よて釈子と成さ  
生と。取外して人道の戀路ふ迷りむを。宜なる事あり。かく  
思子ば。極えて懲しども思をぞれ。此は此人けみねらえ。  
好い心を惑はしむ僧は。ちほて然ふこそ。謾ふ釈氏の法

れみ執りて議ちべからず。有驗の名高た僧も。色不本心を  
乱せ。アとい牙ども。本心が露せ。アとあそ云。ばれ。般若大  
和物語。後撰集あや。此女親は。あくねて後ふ男と共に  
佗國へはうれくて住り。を哀げて。平兼盛。をもこち。は  
人目まれ。山ざと。家居せむとは思ひきや。君と詠て  
遣ひ。返事もせず。よ。ぞ泣り。も。有ア。發心集。近江  
江守永世。ふ女との。亦。今昔物語。大和物語。など。近江介  
中興。が娘。もあるを。誤れる。あはべし。

釋道命は。阿闍梨とて。誦經第一と。世子稱せられ。其驗炳然  
き人ねらふ。和泉式部。ふ深く睦ひ。

道命阿闍梨も傳大納言道綱の子にて天台座主慈惠大僧  
正は弟子あらと幼よて山小登アリ法花經を受持ち初めは  
一年小一卷を誦して八年よ一部を誦し畢ヲハ音微妙コヨ  
て曲を加ス。又音韻を致ス。と云アリ。也聞人耳アリ傾クりて。  
讚歎せス。と云アリ。と無シ。然れど色小耽アリ。僧アリ。和  
泉式部小通カキ。宇治拾遺物語。古事談。東齋隨筆れど小道  
命或時。式部がゆ行ス。臥ス。目覺ス。て經を心ス。澄ス  
て讀ヨミ。八卷讀ヨミ。曉アラキ。不眠ス。まむと爲ス。程。人の氣  
はひの爲ス。けれど彼は誰アレ。そと問ス。已是五條西洞院  
邊アリ。小を旅翁アリ。と答ス。道命あは何事アリ。侍ス。ると云ヘ

は。今宵此御經を承給はス。ぬる事。生ス。世ス。忘カ。く侍ス  
先ス。云ス。れど。道命法花經を讀ス。ことは常ス。事アリ。れど。今宵  
しも言協ス。そと云ヘ。五條れ齋アリ。清ス。くて讀ヨミ。參ス。らせ給  
ふ時ス。梵天帝釈アリ。を始め。聽ス。聞ス。し給ス。翁アリ。とぞ近く參ス  
マ。承給ス。事能アリ。は。今宵は御行水アリ。も候ス。は。讀奉ス。らせ給  
牙アリ。梵天帝釈アリ。も御聽聞ス。候ス。ぬ隙アリ。ふて翁アリ。參ス。寄ス。りて承給  
も。と候ス。いぬる事アリ。忘カ。ごく候ス。也と云ス。り。也有ス。あ。古  
今著聞集アリ。道命阿闍梨と。和泉式部アリ。一車アリ。ふて。も。けへ行  
ル。旅。道命後アリ。むきて居ス。を。を。和泉式部アリ。などかくは  
居ス。ある。そと云ス。れど。よし。や。よし。昔アリ。や。むろ。しい。が。ぐ。との。

あみも合れむねちもあそひとも有り。而て五條の齋とは。謂也。五條の道祖神也。此を眞の塞神也は。向うで後世了祭れる。漢土は卑た鬼の故也。佛法を貴べる妄語を放りるあり。斯る事よりや言出せむ。今昔物語集也。此僧法輪寺は禮堂は籠也。經を讀ん候ふ。一老僧も共に籠とする。其夢ふ。金峯山の藏王。熊野。權現。住吉神。松尾神。あと寄りて。道命が讀經を聞給ふと見ゆる由を記し。法花驗記小は。殊々妄説を加へて。住吉。明神。向。松尾。明神。言聞此經時。離生。業苦。善根增長。仍毎夜所參也。松尾。明神。言我有近所不論。晝夜常來聽經。如是稱讚。礼拜。阿闍梨。あとへて。驗記也。

今昔物語を取て記せる記ある。本書未見。ざる妄説を加めるある。此をもて法師の記せる書とも。殊々妄説多き事を知べし。れや。今昔物語よ。或女小託。は。靈。道命。讀經字聞て。惡道を免れて。天上に生ゆ。由を云ふ事也。其を佛法を信ずる。愚人の靈は常あれど。怪む。小足ら。而て此法師の死後。或人。れ夢ふ。大れる池の中。經を誦む。聲ある。吉。聞。む。道命。音。ある。池中。残見る。小。彼。阿闍梨。船。乗て。來て。云く。我生。ある。時。小。禁戒。持。天王寺。別當の時。小。佛物。用。小。罪。依。て。此池。住。兩三年。逕。罪苦を畢て。都卒天。小。生。あ。と。云。アリ。と。有る。は。僧の靈

常言爾生を怪む不足らば。然れど天上の果は覺束れし。  
釋朝勸も志賀寺は上人を聞えと云う。京極御息所小想を懸  
て。やらを玉緒の古歌を詠し。

寶物集ふ。京極御息所と申へ。左大臣時平公の御女あり。  
延喜は女御不參り給ふ夜。寛平法皇は出立見むとて。御幸  
して見給り。御心よ著給り。老法師小給は正ぬと  
て。押取給へ。旅人の御事あり。此御息所志賀寺へ詣で。給け  
旅至。寺は聖人見奉る。次日彼御息所の御許不參り。對面し  
給へ。正りを悦びて。御手をとりて詠侍正り。初春は初  
子の今日は玉箒。手小執ら。小やらぐ玉の緒と詠えて。今

生せ行業を譲り奉候と云へりと見え。盛衰記。京極御息  
所志賀寺詣のとた。彼寺は土人心を懸奉。今生の行業を  
譲り奉らむを申せば。よしちらは眞の道あるとして。我  
をいされ。方やく玉の緒と打詠め給ひて。御手を授け給  
ひ。正月初子は日。玉箒を賜は。正りの時々。讀出らきし古  
歌ある。或詠免出ある。宇治大納言物語。寛平御門出  
家して。忌じう行ちせ給られ。天狗の詫き参らせ。京極  
比御息所小れとし參らせけると云。

王代一覽ふ。寛平八年ふ。二條后高子。五十六才よて。東光寺  
に善祐と密通有し故う。后は位をもばだ。善祐も伊豆國小  
流さる也有エ。拾遺集。善祐法師流されりる時。母の云遣  
しハ除。あく涙世はみふ海と成あくむ。同レれぎや小流れ  
あるべく。井澤長秀云。伊豆國熱海ふ。紀僧正が墓あらびふ。  
僧正が植し都松とも有り。土俗云く。紀僧正が手おぐら植  
し松あり。都をあくい歎く故う。此松も枝悉く都に向ふ故  
小都松といふ。又を染殿松とも云。ぞいへて。按ふう善祐法  
師が墓を。紀僧正と誤り傳へあるれぬ年。

